

土 淨

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十五年二月廿日印刷納本
昭和十五年三月一日發行

第六卷 第三號

三
月
號



金

陸病

海

軍院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に二ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に五千二百余圓の御寄附が集りました。延數にして十萬冊以上の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

東 慈 道 著 眞野正順師序

病める兵の手記

四六判二五〇頁 定價一圓二十錢 送一四

若き宗教學徒東氏が、年老いた母と若き夫人といたいいけな二兒を残して應召したのは昭和十三年の晩秋であつた。寺院に住まぬ僧侶東氏の唯一の苦惱はその日からの家族の生活であつたと思ふ。而し彼の泰然綽々たる態度は平生と何ら變る所がなかつた。

年少苦難の人生行路は宗教家としての自覺と相俟つて若き聖者の風貌にも似た彼の人格を礎き上げたのだ。今やこの最高峻烈な試験の門出に於て、それが遺憾なく示されたと言ふ事が出来よう。

從軍年餘、遂にたはれて異境に病む身となつた彼が病床四十度の高熱と闘ふこと月餘、今更に死と宗教と、友情と恩愛と、常識人としての彼が、死をみつめつゝ如何なる常識を絶した體驗を感得したであらふか。

言ひうべくんば、これは又、若き求道者が歩んだ人生三十年の記録であり、死への抗義である。戦争と死と恩愛を語る今事變が生んだ最高峰である。戦線銃後の慰問書として是非お求めを!!

これは三上卯之介上等兵の戦線弾雨下に於て得た貴重な血の體驗スケッチである。

八隅部隊工兵上等兵
三上卯之介作

陣中漫画 スケッチ 瘡風 呂

三上は又漫畫界の新進氣鋭を以て知られてゐる。戦地への慰問品として又前線勇士を偲ぶよすがとして必ず座右に!!

内容一般

口繪(オフセツト色刷)姑城、友那兵、友那の子供、決死隊其他數點
陣中川柳、壺漫文、ヒ連ゲマンガ、兵信線ハガキ通スケツチ、激等々

四六判 二五〇頁 美本 定價 一圓二十錢 送一四

發行所

東京 市口 四座 谷東 區京 新宿 二七 宿一 一の三 八〇 八番

資合 社會

三友 社



浄土三月號目次

表紙・扉繪・目次カット……………鈴木金平

人生と信仰 小尾範治 (一六)

銃後美談 朝鮮婦人と兵隊……………鵜飼隆元 (一〇)

にくまれ口……………中野尅子 (一六)

多摩川吟行……………太田耳動子 (一七)

長詩天啓……………飯田光明 (一八)

警備余談 三界の大導師……………東慈道 (二〇)

隨想 舊師におくる……………植村諦聞 (二二)

松井大將と大島大僧正……………本誌記者 (二四)

信仰相語……………中村辨康 (二六)



戯曲 祇園精舎の戀……………須藤一郎（六）

童話 おぢいさんと人形……………小林正一（四）

コント 乞食……………松原敏夫（五）

坂根翁のこと 吉田絃三郎

（一六）

歌壇……………與謝野晶子選（五）

俳壇……………太田耳動子選（美）

漫畫 白衣の勇さん……………三上千坊（四七）

心経 智慧から慈悲への大行……………中村辨康（七）

讀者だより……………（五）

編輯後記……………（四）

浄土三月號目次……………

礦化學研究所製品
帝國學士院賞受領
日本化學會模範賞受領
世界十一國製法特許



健康増進に

理研 ヴィタミン

過勞を回復させる

ビタミンAの不足は運動選手をスラムプに陥れ
ると言ふ、全身の新陳代謝に大きな作用を営む
ビタミンAが體活力増進に、數勞の回復に重要な
要素たることは勿論なのであります。

風邪ひかなくなる

風邪の豫防にビタミンA・Dの効果は有名です
これからは過勞から風邪をひく事が多いから、風
邪ひき易い體質の人は勿論、健康者もビタミン
A・Dを充分に攝つて呼吸器を護るべきです。

推賞される純良品

古くは肝油、最近では種々の肝油劑がありますが、
理研ビタミンは肝油から抽出した純ビタミン
A・Dを豆粒大の小球に濃縮せる純良製品です。
ビタミン含有量も消化吸収も斷然優秀で、健康
増進に活潑な効果を信賴推奨されて居ります。

四〇球…二圓 一〇〇球…五圓 藥店にあり

株式會社 三國商店

浄土

三月號

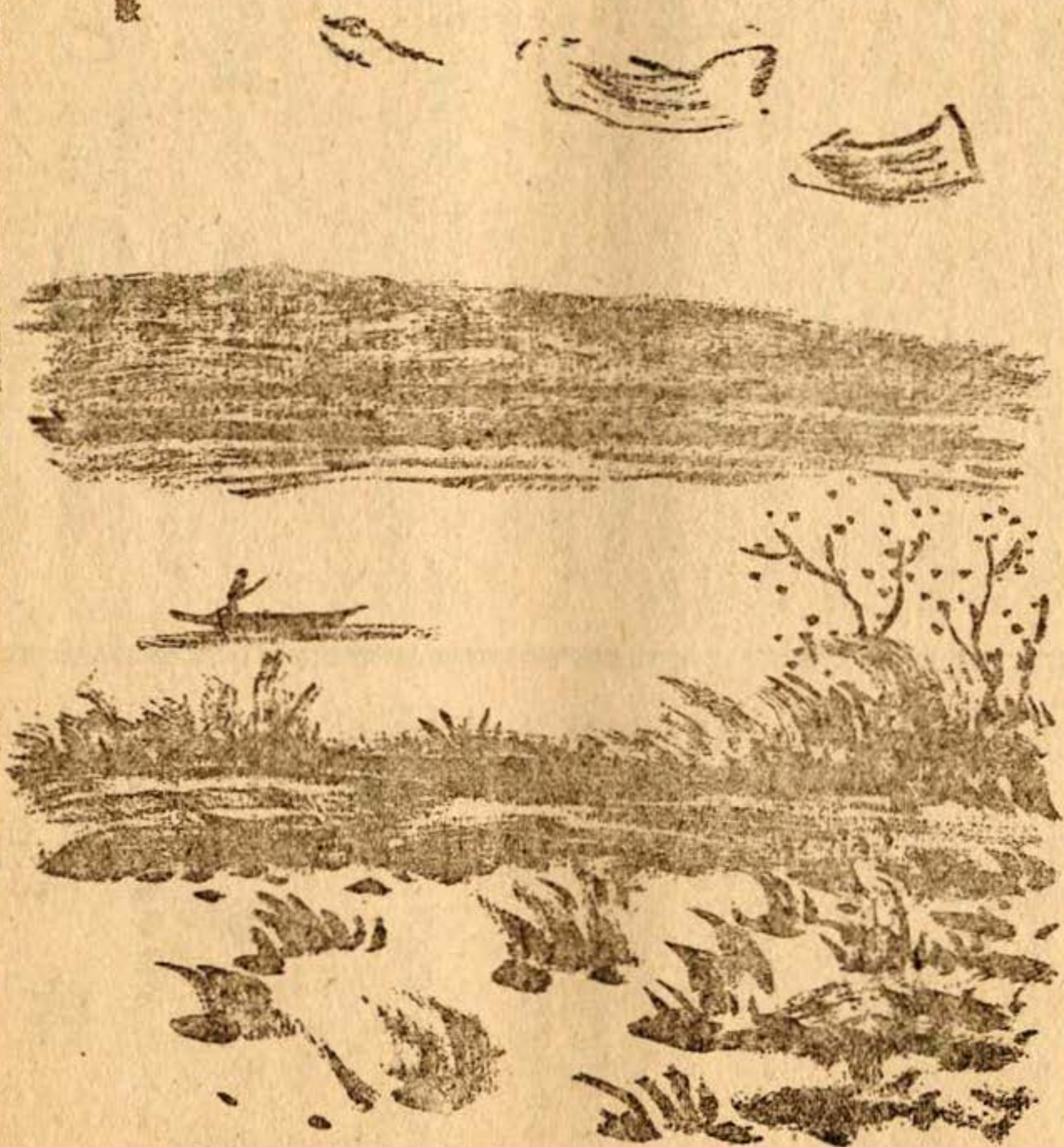
樂の戸にあけくれ

かゝる白雲を

いつむらさきの

色にみなさん

法然上人詠歌





人生と信仰

中央放送局
教養部長

小尾 範 治

この世に生きとし生けるものはいづれも死の運命を免れることが出来ない。がしかし人間以外の生物は、たとへ高等な動物で意識を有するものでも自覚を缺いてゐるから、死について苦痛や恐怖を自ら覺えることはない。即ち高等動物には意識があるから、たとへば怪我をした場合にその痛みを感じ、従つて苦痛を味ふには相違ないが、かれらはたゞそれを苦しいと感じるだけであつて、それについて自ら憐れんだり悶えたりすることはない。しかるに幸か不幸か人間には自覚があるから、生の喜びを味ふことが出来るだけ、その終局である死の苦惱を嘗めざるを得ないのである。勿論文化や教養の高いか低いかに従つて自覚に強弱の相違があり、自覚の弱いものは生死について自ら省察することが少いから、生を喜ぶことも浅いだけ、死を苦しむこともまたさほど甚しくはないであらう。これと異つて文化人として、教養人として強い自覚を有するものは、生死についてもさまざまのことを考へ、生死の謎に思ひ煩ふことが少くないであらう。かやうな思念や煩悶から生れたものが宗教である。いふまでもなく人が宗教の門をたたく機縁は必ずしも一樣ではないだらうが、生死の問題を入信の一大因縁としてゐるのが佛教であつて、佛教では生死を人生の大苦として説き、この苦を超

長詩

天 啓

— 嗚呼明石海人 —

飯田 光明

號泣の果てには幽かなる嗚咽を續けたり
けふも、昨日も、また先の日も
呻吟し、慟哭し、嗚咽を續けたり
粗い壁
壁に鼻ぶちつけて
深夜、虻が羽搏いてゐる
虻！
まこと、海人も一匹の大いなる虻！
粗い、かたい、癩てふ現實の壁に
ぶつかり、ぶつかり
落ちては羽搏きまたぶつかり
慟哭し、號泣しつゞけたる

脱する道として教説を立ててゐるのであるから、佛教の教化を最も多く受けて來たわれわれ日本人に取つては生死の問題は古來人生の最大關心事と見られて來たといつてよい。生物が死ぬのは自然の約束であつて、いかなる生物も免れることの出来ない運命であるとすれば、死を恐れたり、死について悶えたりすることは自然の理法を辨へない愚者であるに相違ないが、人生は自覺をもつてゐるためにさういふ愚者でよりほかあり得ないのである。従つてわれわれ凡人がかやうな愚者であるばかりでなく、いかなる非凡人もこの點では等しく愚者たらしめるものはないといつてよい。それ故にこそ高僧法然さへも自ら自分を愚者と呼んでをられるのである。人間として自覺の強いものほど恐らく自分の愚をはつきり覺つてゐるに相違ない。そしてかやうに自分の愚をはつきり覺つてゐるものこそ、いかにかして生死の煩惱から救はれんことを希つて宗教の門をたたいたのであらう。

二

われわれがここに生死の問題を重大視するのは單に死の恐怖や苦痛から救はれたいためではない。寧ろ死の恐怖から解脱することによつて生の意義を明確に自覺し、その實現に精進せんがために外ならない。元來人間が死の恐怖を感じるのは自己保存の本能を自覺し、出来るだけ長く生存したいからであるが、しかし、單に長く生きたいといふだけでは大した意味はない。動物にさへ人間以上に長生するものがあるから、そんなことでは人間は動物以上に出ることは出来ない。實に人生の意義はたゞ長く生きるといふことではなくて、長生して人生の價值を實現したいためである。勿論人生の價值は必ずしも長生を必要とするものではないが、しかし同じ力であるならば短期間よりも長きに亘る方が一層大なる價值を實現する可能性があるわけである。それ故に長生することはそれ自身價值ありとはいはれないだらう

傷ましき大いなる蛇なりき。

二

鼻はうみ腐り、たゞれ落ち、もど
とられて美醜を分かたず
喉頭には孔をうがちて管を通せり
目を喪ひて義眼も入れえず
妻が見えず
子が見えず
親が見えず
花が見えず
山河また暗し
その淋しさを想ひかなしみて、せ
めて慰めやらんとすれば
彼は心の目でいつも凝視めてゐる
といふ
闇黒にひとり耳をそばだゝて聞く
音をみれば
すべて光となり
形象となるといへり。

が、しかしそれがより大なる價值實現の 前據となり、條件となることによつて意義を有するものである。従つて人間が長生を希ふことは當然であるといつてよい。けれども今述べたやうに人間が長生を希ふのはそれによつてより多く生の意義を實現せんがためである。そして生の意義を實現せんがためには生がいかなる意義を有するかを知らなければならぬ。がしかし生の意義を知るためには同時に死が何を意味するかを明かにしなければならぬ。生と死とは一體であつて分つことの出来ないものであるから、生と死が何を意味するかを知つて初めて人生全體の意義を悟ることが出来るであらう。そして人生全體の意義を悟つてこそ生き甲斐ある生を営むことが出来るであらう。生を明らめ死を明らめることは決して佛家のみの一大事ではなくて、苟くも生の意義を實現して生き甲斐ある生を営まんとするものゝたれしも忘れることの出来ない最重要事である。

三

けれどもこゝに生が何を意味するかを覺ることを人生の要件と見るのは、單に生死の意味を知ることだけで足りるといふのではない。といふのは人間は自覺を有するものとして、生と死とが何を意味するかを知ることが希ふとも、生死は人生の事實であり、人生は行に外ならないのであるから、われ／＼は生死の意味を知ると同時に、その意味を行ふことを求めるものである。即ち死の意味を覺り、それに徹して現實の生を営まなければならぬ。要は現實の生を目的に叶つたやうに営むことであるが、しかしそのためには生死の意味を覺り、死の恐怖から解脱して全身全體を生の意味實現に投ずるやうにせねばならぬ。絶えず死の恐怖に囚れてゐるやうでは思ひ切つた活動は到底営むことが出来ない。南洲翁は命も要らぬ名も要らぬ底の人物でなければとくに國家のことを談ずることは出来ないといはれたが正

三

三十餘年、闇黒の世に
癩にまつはられたる身の朽ちゆか
んとするも
人としての呼吸、いま脈々として揚
るを知る
人間廢業の境
諦念の空

あか／＼と晴れ渡りたり
はげしかりし大いなる蛇の羽音は
すでにかそけく

諦念の青春はまさに深く美はしく

輝き

輝き

あゝ、肉ほろばんとは！

四

假装をなげうちて粗衣もまとわす
獨り

にその通りである。

現に大陸の野に戦々たる武勳を立てつゝある皇軍の將士は身命を大君のために捧げてゐるからこそあのやうな目ざましい奮闘が出来るのである。しからば、わが皇軍の將士はいかにして死の恐怖を克服したのであるか。それは恐らく神國の國民として神のミコにましますわが大君に身命を捧げることはやがて神國の神として生きる所以であることを信じてゐるからであらう。即ち國のために、死することは國のために生きることであるといふ堅い信念によつて死の恐怖は克服されてゐるのである。この信念こそやまと魂の中核であつて、これあるところ、いはゆる艱苦もその奮闘を阻むことが出来ない。

わが皇軍が無敵である所以はこゝにあり、今日鐵血やハンマーを手にしてゐるものも、明日召されて、直ちに無敵の勇士となるのが出来るのは實にさういふ信念を堅持してゐるからである。そしてこれは單なる道徳的觀念ではなくして祖先以來われ／＼の精神の奥底に深く埋はれて來た宗教的な信念である。従つてそれはわれ／＼日本人に取つては殆んど本能ともいふべきものである。

外國人には日本人を無宗教の民族であるやうに見るものがあるが、それは全く見當違ひの批評であつて、神國の國民としてわれ／＼日本人は國家の永遠を信じ、國のために死ぬことは國のために生きることであるといふ不拔の信念をもつてゐるからである。

しかもこの信念を強化したのが佛教である。佛教には本來厭世的調子が多分に含まれてゐたのであるが、天性清明を尙ぶわが民族は佛教の積極化を積極化し、人生の儚さを哀しむよりも寧ろその儚さに徹し、死の恐怖を克服して儚ない生の中にありながら泰然として君國のために働くことが出来るやうな性格を養ふことが出来たのである。

荒涼の丘に立ちて自我を曝す
諦念は澄みて、そねみもなく
慟哭は止みて、嗚咽も消え
哀しみもなく
憂ひも感ぜず
かくて癡てふ現實もまた浮動する
煙！

さはあらんと想ひはすれど
悲惨なる姿に、せめて慰めやらんと口をきけば

彼は莞爾としてならはしにいふ
人の世を脱れて人の世を知り
骨肉と離れて愛を信じ
明を失ふては内にひらく青山
白雲をも見しと。

あゝ、彼にありては
實に癡は尊しの天啓
まことに癡は天啓なりき。

了。



銃後の
美談

朝鮮婦人と兵隊

感激した半島同胞の思ひ出

鵜飼 隆 玄

『山も青い
水も美しい
而も何等の恐怖も感じない、
噫！何んと云ふ有難い國だ！』

か……？

歸還後にこんな印象を受ける時實際私は淋しい氣持にならざるを得ないので。

同胞の祖國愛の姿の中から二三を拾つて紹介してみやうと思ふのです。

×

これは私が大陸に轉戦二年の後昭和十四年〇月〇〇日〇〇港に歸還第一歩を印した時の感想ですが、恐らく砲煙彈雨の中に鐵火の洗禮を受けて暮した凡ての勇士諸君が歸還第一歩を祖國に印した時の感想でもあるでせう。

有難さを忘れた人達には眞實の生活はありません唯自利的な慾望のみの生活が續くのです。こんな事で東亞新秩序の建設と云ふ大事業が私達の手ではんとうに完成出来るものでせうか……？

私達は事變勃發の當初應召の名譽を擔つてなつかしい祖國を後に生還を期せざる征途についたのです。そして道を半島にとり内地以上の熱烈な歡送を受けて滿洲國に入つた最初の驛での事です。

『支那の慘狀を目撃したとけによけい「有難い國だ」と言ふ事を痛切に感ずるのですが戰禍の實狀を知らない人達は祖國の有難さと言ふものを知らない人が多いのではないでせう

私達は大いに反省しなければならぬと思ふのです。こう云ふ考へが胸に浮ぶ度に思ひ出されるのは『日本國民』として再出發した半島出身同胞によつて示された熱烈な祖國愛の姿です。私は自分が感激させられた、半島

昭和十二年〇月〇〇日の朝まだき思ひ出深い鴨綠江を渡つて盟邦滿洲國に入つた瞬間『外國へ來た』と意識し、それと同時に何んだか言ひ知れぬ淋しさに迫られるのでした。

そして列車が〇〇驛に停車すると直ちに實
弾が配給せられ銃空監視、車上警戒を一層嚴
重にせよと注意せられますと愈々戦場に來た

のだと言ふ緊張感が起るのでした。
注意が終つて私達が各列車に引き揚げて來
ますとドヤ／＼とホームに現れた國防婦

人會員が數十
名ばかり貨車
の出入口まで
來て

「兵隊さん御
苦勞さんです
ネ」

「兵隊さん洗
濯ものはあり
ませんか」

「兵隊さんお
茶はいりませ
んか」等と口
々に話してく
れるのです。

屯營を出發
してから内地
や特設を通過

する中に幾萬かの國防婦人會員等の歡送を受
けたのでした。「國境を越へた」と云ふだけ
で既に感傷的になつてゐた私達にこの月並の
慰問の辭が強く胸をうつのでした。

暑氣の厳しい大陸を初めて軍用列車に乗つ
て來たのですから車内の蒸し熱さと煤煙で黒
になつたシャツを差し出して

「有難ふ、お願ひします」
と洗濯を依頼しながらシミ／＼と血の親し
み、同胞の有難さに目頭の熱くなるのを覺え
ました。

朝食を了へてもまだ出發の時間までに餘裕
があるのでブラ／＼と驛の構内を散歩してゐ
た時フト目に留つたのはホーム裏の水道端で

汗を流しながら一心に私達の衣類を洗濯して
ゐてくれる國防婦會の體をかけた半島婦人達の
姿です。

「ア、濟ない」
と思はず頭が下るのでした。
先程洗濯ものを取りに來てくれた内地の婦
人達は稍々離れた木蔭や軒下で靜かに扇を使



つたり化粧刷れを直したりしてゐるではありませんか。

私達の前に親切そうに照れた婦人達は唯形の上で穢染しその蔭に隠れて眞鍮に私達の爲に働いてゐる人達、私達の爲に引いては御國の爲にと黙々として努力してゐる姿こそ世にも尊いものではありませんか。

この内地人と半島人の對照こそ美醜の兩極を示された様な感じが起るのでした。

やがて洗はれた衣類は再び内地婦人の手によつて兵隊達に配られたのでしたが、

『これは誰が洗つたのか』

と思へば『有難ふ』と答へるのすら半島婦人達に濟まない様な思ひがするのです。

定款列車はホームの同胞達の叫ぶ萬歳の聲に送られて前進し始めるのでした、この時半島人達は襤褸らず水道端で濡れた手に國旗を振つてニッコリと笑ひながら送つてゐてくれるではありませんか、私は思はず大聲に

『皆さん有難ふ』

と叫ばずにはゐられませんでした、調子はす

れの私の聲に驚いた戦友に種々と『御禮』の理由を説明しますと

『そうだったのか、君の戀がほんとだよ』
感に迫つた様な面持ちで皆が答へてくれるのでした。

今戦線に向ふ列車に乗つてゐる兵隊の胸にどちらが眞に銃後を托し得る人として映じた事でせう……？

その時から滿二年の後故山の土を踏んだ私が國防婦人會員諸姉の活動振りをみるにつけいつもあの〇〇驛頭の情景が臉に浮ぶのです。蔭に隠れて黙々として働く熱烈な報國奉仕者の姿を求めては慄然として背を正し〇〇驛頭の半島婦人達の姿に合掌するのです。

×

當時北支方面は四十年來にないと云ふ大豪雨の爲に輸送ダイヤが狂ひ私達は〇〇驛を迂回して目的地に向つたのです。

八月〇〇日山もなく何もない茫漠千里の蒙古大草原を走り續けた列車は夕刻には草の中に沈む眞紅の太陽の光を浴びながら〇〇驛の

ホームに入つたのです。

人煙稀々と云ふ形容詞通りの土地で二三里或ひは五六里も走つては人家をみると云ふ状況でしたから〇〇驛頭で邦人の出迎へなんかは豫想だにしなかつたのです。

然るに愈々ホームに着いてみると一人の邦人が國旗を振つて出迎へてゐてくれるではありませんか、私達は思はず知らず萬歳を叫ばずにはゐられませんでした。

聞けば彼は滿州事變に従軍し、現地除隊をして興亞の礎となる覺悟で内蒙古軍の指導員として勤務し明日の蒙古を背負つて立つ青年指導に努力されてゐられるのだそうですが内地からの軍隊が通過すると聞いて今朝早くから驛に待機してゐたのだと如何にも人なつかしさに種々と内地の現況を語つたり、内地の情勢を聞かれるのでした。

海山千里遠く異郷に同胞と共に語る親しみは又格別な感情の湧くものでした。

彼氏と語つてゐる内、實に一人のみすぼらしい半島婦人が手提籠に數個のマクワ瓜を入

れてホームの端から近寄つて来るではありませんか、

『ア！鮮人の女だ』

と私達が聲をあげると彼は

『ア！忘れてゐました。なつかしさの餘りつ

い皆さんにお話しなかつたのですが、この半

島の婦人は〇〇に住んでゐる唯一の人です。

皇軍が通ると聞いて私と同じ様に朝から待つ

てゐたのですよ。何時通るかも知れないのだ

から歸つて食事でもして来た方がよいでせう

と申しますと、イ、エ！私は歸りません。例

へ是處で三日待つても御國の兵隊さんが恐ろ

しい戦場に向つて下さるのに見送せずにと

うして歸れませう。

妾達がこんな奥地で無事に歸かして歸け

るのも全く兵隊さん達のお蔭です。一日や

二日食はずにでも兵隊さんを目送らして歸か

ねば陛下の同じ國民として申譯ないではありませんか！

今私にこれと言ふ御慰めも出

来るのではありませんがせめて私の畑にとれ

た瓜なりと差上げて「兵隊さん御苦勞様です」

と一言お禮を言はせて歸

かねば歸りませ

んと言

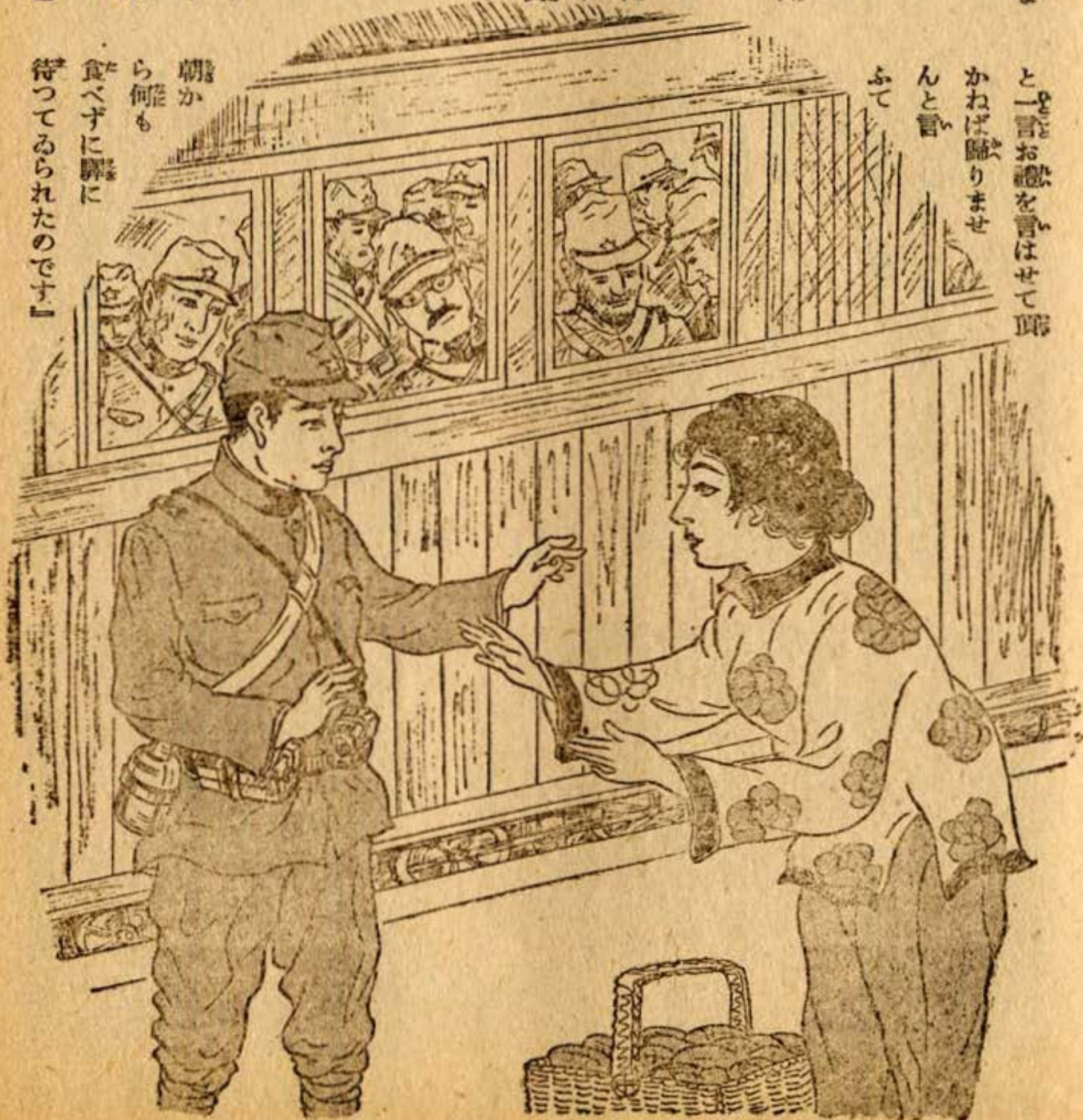
ふて

朝か

ら何も

食はずに歸に

待つてゐられたのです』



と婦人を紹介される中に私は『寛政の一燈』と云ふ話話が胸に浮び感激の涙にくれるのでした。

『兵隊さん御苦勞様ですどうぞ立派に働いて私達の様に支那の人達も幸福にしてやつて下さい。これはつまらぬ物ですが私の畑にとれたものですからお食り下さい』

と婦人が差出す手籠の中から一つを貰いて『有難ふ、何よりの品です、私達だけで頂くのは勿體ないですから各貨車に分けてやつて下さい』

普通なれば幾個でも欲しい私達が眞心籠つた一つの瓜に満足させられるのでした。

『勿體ない、何が勿體ないのですか當り前の事です、同じ國民ではありませんか！』

それよりも元氣で行つて来て下さい』

と靜かに頭を下げて次の車へ去り行く後姿には光りがさしてゐる様に有難く感じました。

『同じ國民！』 そうだそれに違ひないのだ。

今日まで朝鮮人としてその誤つた優越感を誇示して來た私達はお厚しい譯だ。彼等も立派

に時局國民としての自覺を持ちが一燈の誠心を捧げて報國の道を歩んでゐるではないか！内地で二、三の外道的な行爲をする者を標準にして一燈を律してゐたのは私達の認識不足であつたのだ。半島合併以來既に三十年に垂

々とし既に治く恵まれた皇國に感謝した彼等は過去の一切を忘れて新しく日本國民として再出發してゐるのである。儼い眞實の日本人の姿をこの大陸の果で而も半島同勝の中に發見したのだ』

私はこの思ひに到る時人知れず合掌するのでした。

×

九月一日露々第一線に到着して直ちに涿州保定の會戰に参加し、あの永定河瑣瑣河等の激戦渡河戰に鐵火の洗禮を受けて儼い戦場體験を得ましたが、引き續き石家莊、滄陽河の戦闘に参加する爲天津に引き返し、この作戦の終了を待つて私達は豊河北岸捕獲作戦に臨む爲、津浦線を南下したのでした。

時は十一月の○日午後三時頃で天津總站

で貨車搭載を終つて驛前の棚床で休息してゐた時でした。

ヨレ／＼の着物を素肌に着た三十五六歳の婦人が突然私達の所へ近寄つて

『兵隊さんお食ひなさい』

と言ふて熱柿十個程を差出すのです。然し私達は相手の婦人が餘りにも慘めな姿であるので突然の申出に誰一人として手を出す者がありませんでした。

『キタナイとでも思ひますか。これは今其處の店で買つたばかりですよ』

と尻込みする私達に説明するのは、そこで私は

『いやそうではないのですが、この熱柿は貴女が必要あつて求められたものでせうからと思つて贈らずにゐるのです』

言葉を濁しますと

『それはそうです、實は昨日私達はやつと豊徳から天津へ引き揚げて來たのですが、途中は相當苦しい旅でしたから子供が發熱して寝てゐるのです。その子供が熱柿が食べたいと

申しますから、今残り少い鉢で求めて来たのです。兵隊さん達が戦線へ出られる姿をみて今日までのお禮をさして頂きたいと思つても何もする力がありません。が、せめて今求めて来た熟柿なりと食べて頂かうと思つて差上げるのです。子供の事は又何んとか致しますからどうか私の心を汲んでお食ひ下さい」と誠心こめての言葉に

「有難ふー お志は有難く頂きますがどうかそれは待つてゐられる子供さんにあげて下さい」と申しますと彼女は如何にも不満さうに

「兵隊さんは私が半島人だから貰つて頂けないのですか。私達親子の命は兵隊さん達に依つて救はれたのです。それなのにこれから不自由な戦地へ出られる兵隊さんに何の御禮も出来ないのが残念ですから、せめて私の心だけのものでも受取つて下さい。子供には話を話して聞かせますから、どうぞ受取つて下さい」と涙を流さんばかりに語られるので

「有難ふー」では頂きます。然し流して貴女が半島人であるが爲に頂かなかつたのでありません。私達は貴女が何處の人かは知りません。唯日本の婦人だとしか知らなかつたのですから誤解せずにおいて下さい」

「そうです。私達も日本人です。貴君達と同じ陛下の國民です、私はもうこんな嬉しい事はありません」

と唯日本人だと云ふた言葉に嬉し泣きに泣くと云ふ有様でした。私は日本人として遇されただけでこゝまで感激する半島同胞のイデラシサに感銘深いものがありました。

その時の熟柿は餘り美味しいものではなく誰も頂く者はありませんでしたが、半島婦人の誠心と共に軍用列車に便乗して黄河を目指して南下致しました。

病熱の吾子に與へる爲に求めたものを皇軍の姿をみてはお禮の微として差出さずに居れない氣持や「私達も日本人です」と云ふこの自覺こそ實に尊いものではありませんか。私は歸還した昨秋、吾家の柿の鈴成りに黄ばんだのをながめてはあの天津鐵路駅の事を思ひ出して微笑まずに居られませんでした。

× × ×

この様な思出はまだ澤山ありますがこの三話に留めて最後にこれだけの事を申し添へて置きます。

私は二年の戦地生活で北京、天津、濟南、青島、石家莊、彰德、新郷、開封、漢口、南京、上海等の邦人進出の町を知つてゐますが舊租界の町では道で出會ふ人達は子供に到るまで軍人に敬意を表されるのを覺へて居ります。が新進出地の人達ではこんな美しい相に接した事がありませんでした。何故でせう。事變前租界生活をした人達は戦争の何物であるかを知り、皇國の尊さを教へられ軍隊の有難さを體驗して来た爲ではないでせうか。事變後内地から大陸へ進出して来た人達にはこの尊さ、有難さが解らない爲ではないかお互に大いに反省してみやうではありませんか。その時何かの参考にと思つて感激した半島同胞の姿を二三紹介させて頂きました。



阪根翁のこと

吉田 絃二郎

阪根翁の養家は維新の兵火に焼け、養父から遺されたものといつては八千兩の借財のみであつた。翁の篤實といふことはこゝにもあらはれてゐる。たいていの人ならば八千兩の借財に對しても何かと理由をつけて割引をしでもらふやうな考を起すであらうが、翁は養父の借財については債權者に一文の損害もかけなかつた。翁はこの前にも記したやうに、養父の借財を返してしまふまでは夜の目も寐ないといふほどの働き振りをつゞけて行つた。翁は古鐵買ひを營んでゐたが朝から晩まで草鞋を解いたことはなかつた。たま／＼家に歸つて晝食をしたためるにしても、決して草鞋を解かなかつた。

翁が八千兩の借金を返してしまつた時、翁の手には一抱への借用證書がかへつて來た。翁は大雲院の御先祖の墓の前に行つて「御先祖様、おかげさまで借金はすべてかへしましたから、御安心なさつて下され」と言つて、墓前にぬかづいた。そのをりの翁の感慨は如何であつたらう。翁はその場で堆い證文を焼き捨てゝしまつた。養父の莫大な借財を返済するといふ事だけでも容易ならぬことであるが、翁は本光院、大雲院、西光寺、法然院、圓通寺、安樂寺、轉輪寺、泉谷西住寺、總本山知恩院に對しては生涯最も熱心な世話をつゞけて行つた。西住寺のために三年の間一日も缺かさず二里の道を往復し

た。或る時のごときは寺のことを考へ考へ歩いてゐたので、泉谷に行くのを道をあやまり嵯峨へ行つてしまつたといふやうなこともあつた。

翁は一生を養父のため、寺のために働き、人のために盡した人であつた。左様な關係からして翁の周圍にはまことに立派な人たちが集まつて來て、翁の偉大な感化に浴してゐた。

翁は決して人を説き、自分の主義を説くといふやうな人ではなかつた。翁は、二六時中たゞお念佛を申す人であつた。しかも翁の默々たる感化力はたとへば芝蘭のおのづから人の心を和やかにするやうな根強い力をもつてゐた。世間では不羈狷介と思はれてゐるやうな人たちが、唯々諾々として翁の言葉に耳を傾けてゐた。この一事でも翁の徳の力のいかに大きかつたかといふことを想像することが出来る。

村井貞壽

翁の感化を受けた一人に村井貞壽がある。この人は先年非常な高齢をもつて世を去つたが、京都に於ける女性

として最もすぐれた一人である。村井といふのは貞壽の養家で、京都では最も聞えた料亭である。村井といへば祇園の一力よりもさらに一段上位に在つたものである。

村井貞壽は江州修原に生まれ、幼いころ京都へ奉公に出て來たものである。もと／＼裁縫が上手であつたところから、或る仕立屋に勤めてゐた。たま／＼その仕立屋が村井のお出入であつたところから、仕立物を抱へては村井に使してゐた。貞壽の若いに似ず賢く、頼もしげな言葉づかひ、振舞に目をつけたのが村井の女主であつた。かくして貞壽は村井に引き取られ、やがて養女となつた。

村井の女主の眼は狂はなかつた。貞壽は生まれながらの惻隱さに加へて、女性としてはめづらしい凛とした男まさりの氣性さへ持つてゐた。時はあたかも明治維新の大變時であつたし、京都は勤皇倒幕の中心地であり、諸藩の浪士達の血なまぐさい噂も絶えないところであつた。貞壽が女性として、いかに大きな役割を演じたかといふことは、こゝにその全貌を明かにするわけにはゆかないが、ともかく木戸孝允を危地に救ひ出したといふ一事だ

けでもほゞかの女の人となりを想像することができぬ。乞食姿にまでなつて活躍してゐた木戸孝允が幕吏に捕へられやうとしたをり、長櫃の中に入れてかれを救ひ出したのは貞壽であつた。

頼三樹三郎がつひに囚へられて江戸に送られたをり軍鶏籠に入れられて行くかれを、ひそかに蹶上まで見送つて行つて名残を惜しんだのも貞壽であつた。かの女こそ維新時代に於ける京都の最も典型的な勤皇女性であつた。

かの女はかやうな男まさりの半面にはまた美術鑑賞にも一見識をそなへてゐた。未だ世間が宗達や光琳などをもてはやさぬ間に、貞壽は宗達、光琳の作品を蒐め、村井の模などはほとんど宗達の筆に成るものであつた。幾萬金を投ぜねばならぬやうな香爐のごときも、かの女は人の氣付かぬ間にちやんと見分けてゐた。

かやうにすぐれた女性であつたが、佛事、宮寺のことについては、何事も阪根翁に相談を持ちかけてゐた。

林 新 助

京都に林新助といふ骨董屋があつた。京都第一の骨董商であり、岩崎、三井の富豪をはじめ、伊藤博文、殊に井上馨には非常なお氣に入りであり、一代にして巨萬の富を積んだ人である。この人はなか／＼の親孝行であつたが、その母といふ人がすつかり阪根翁に信頼してゐて、何か事があると、「阪根さんにおたづねしてごらん。阪根さんがよいと仰しやるなら」と言つてゐた。そのため商賣の道にかけてはなか／＼豪の者であつた林新助も、阪根翁の前にはおとしい平凡な男であつた。

貞 鏡 尼

袋中庵に貞鏡尼といふすぐれた尼僧があつた。

この尼僧はもと江州八幡の豪商の愛妾であつたが、自分から身を引いて尼となつた人である。

この尼僧はなか／＼天才的な人で、自分で紺紙を作り見事な三千佛を金泥で描き上げた。その出来栄もまことにすぐれたもので、これは知恩院に納つてゐる。

また袋中庵にもこの尼僧の三千佛があるが、この御佛像を描く時などは庵の他の尼僧たちと朝夕同じお勤めを

つゞけながら、わづかの暇々に筆を執つたものである。わづかの暇を偷んでよくもあれほどの傑れた作ができたものだと驚かされる。

阪根翁は機會ある毎にこの尼僧のことを人にも語り、人知れず尼僧のために計つてをられた。

一中節の都邑

一中節の師匠に久吉といふ女があつた。後に都邑と名乗つた。この女も長壽を保つた人であるが、たしかに一中節の名人として、洛中にもかの女に比肩すべきものはなかつた。ところがなか／＼のやかましやで、一ヶ年辛抱すれば自分の名をゆづるといふ約束で弟子を取つても三ヶ月とつゞく弟子もなかつた。名人にありがちの、自ら持するときにはめて高く、かつて人に膝を屈せぬ女であつた。ところがこの都邑が阪根翁だけは何も彼も頭を下げてゐた。

地藏流し

阪根翁は毎年地藏流しの行事を營んでをられた。

一年の間に翁を訪れて來た人々の名刺や死亡者のお禮

狀などを大切に保存して置いて、大きな名刺などは二つに切り、その一つ一つにお地藏さまや、御名號を捺してそれを淀川に流すのである。夏になると店の奉公人たちは一つ一つの名刺や葉書などに御名號の印を捺するのが一仕事であつた。さういふものが箱一杯になつてゐた。

翁は寺關係の人、信仰上の知己を招いて、淀川に出かけて行つて地藏流しをされた。これを毎年一度も缺かされたことはなかつた。まことにありがたい心がけである。

古代の鏡

翁は商人であつたが、決して信仰に關する商賣はされなかつた。かつて三河の寶來寺から手紙が來て、古金を見に來てくれといふことであつた。翁は早速三河まで出かけて行かれた。寺には古代の鏡が長持に數杯はいつてゐた。金目にして莫大なものであり、買つてかへればなか／＼の利益であつた。

しかし翁は遙々三河まで出かけて行つてゐながら、つひに一枚の鏡をも買つては來なかつた。翁は信仰に關する物を賣買して利益を得るといふことはかつて一度もされなかつた。翁の如き人こそ君子ともいふべきであらう。

警 備
餘 談

三 界 の 大 導 師

東 慈 道

鈴 木 金 平 畫

(一)
蒼い空に眞白な雲が流れてゐた。

激しい討伐が終つた直後であつたから、私達はのんきに町の警備についてゐたが、その日もかんかん照りつける陽に汗を流しながら、馬の手入れをしてゐた。

「俺の馬は今度の討伐ですつかりやせちやつたよ。せつかくふとらしてゐたのになあ……」
「やせたくらゐならいゝよ。俺の馬なんか足を怪我して當分使へないよ」

馬の體をゆつくりこすりながら原田と鈴木とが話してゐた。私は前脚を洗つてゐたが、蹄鐵がひどくすり減らされてゐるのが、激しかった十日間の討伐を思ひ出させた。

「全く今度の討伐では馬が一ぼん可哀想だつたな」

「うん、毎日砲や彈藥を背負ひつゞけたつたからな」

「攻撃にうつる直前、そゝりたつた山をよち登つた時は死ぬ思ひで手綱をとつたよ。疲れきつてゐる馬はあせつて夢中にはやるし、手綱を一寸でもゆるめると、馬にひき倒されさうになつてね……」

「そう、そう。あの時は生きた心地はしなかつたな。俺なんかあぶなく馬もろとも深い谷底へころげ落ちるところだつた」

鈴木と私は馬の手入れをやすんで喋りつゝ、付けてゐた。原田は馬の脚の繯帶をとりかへて



ゐた。白い雲が悠々と動いてゐて、川のクリークに大きな影を作つてゐた。近所には小さな土造りの民家が強い陽ざしを受けてきらきら光つてゐたが、どの家にも人影はなかつた。私達は間もなく馬を駈——民家を改造したものだ、支那人が歸つて來たら馬糞に汚されたことをきつと怒るだらうが——にひきいれて、軒下に蹕んでゐた。他の分隊の者は宿舎で銃や砲の手入れをしてゐるのか、馬はまだ通りにつないだまゝで、誰もかまつてゐない。

「バナナ賣りでも來ないかな」

「だいぶ喰べなかつたな。食いてえ、食いてえ、食いてえよ」

鈴木が原田の言葉に食欲を轉殺されて、言葉で獅子をとつて私の肩をたゝいた。私も急に喰べたくなつて立上つた。しかし、バナナ賣りどころか支那人は子供一人通らなかつた。

「あゝ、衛兵が歸つて來たぞ！」

クリークの岸づたひの石疊道がかつかつな

らしながら徹宵で警備してゐた我が小隊の十人餘りの衛兵が歸つて來た。

「やあ、御苦勞さま！」

私達はかけよつて銃をとつてやつたが、二人の者は大きなバナナの房を持つてゐた。

「立派だらう！ お前達が食ひたいだらうと思つて市場で買つて來たんだ」

私達の分隊の吉田上等兵が鈴木に笑ひながらわたした。すぐもぎとつて私達は喰べはじめた。

「あつさりしてゐやがるな、俺はまだ食はないんだぜ」

「喰べなかつたのか。これは失禮」

鈴木はむしやむしや喰べながら宿舎に歸つて行つた。二分隊の田中がとんで來て、

「みんな疲れたらう。風呂が湧いてゐるんだ。すぐ這入つてぐつすりやすめよ」

と言つて、また急いで風呂場にかけて行つた。

「ではぐつすり寝るかな、疲れたよ」

大庭伍長が眠むさうな眼をしばたゝいて、

その後について行つた。

「ゆふべの衛兵には一寸謁つたね」

吉田上等兵が私と歩きながら話しかけた。

「匪賊が五六名で蘆草屋を襲撃したんだ。三名はとらへたが、おかげで一晩中ごたごたして一睡も出來なかつたよ」

「ほう、こんなに治安が回復してもやつてくるんだな」

「治安維持會なんてあてになるもんか。××が匪賊の頭目と連絡とつてゐるらしいからね」

「へええ、油斷もすきも出來やしないねえ」

うす暗い宿舎の中に這入つた。

「おい、手紙がうんと來たぞ、いま古賀伍長が持つてもどつて來たところだ」

減多に笑はない陰氣な大賀が顔をくずして嬉しさうな言葉を浴びせかけた。

「そうかい。俺にもきつときてゐる筈だ。それではもらうまではねむれないな」

吉田上等兵が古賀伍長のある二階をじろつと睨んで、物欲しさうに笑つた。

(二)

「おうい！東は歸つて来たか」

「はあ、歸つて来ました」

「ちよつと上つて来い！」

二階から古賀伍長が大きな聲で囁きつた。

「手紙だぜ。俺のももらつてきてくれ」

吉田上等兵が拜むようにたのんだ。

「俺のも」

「たのむ」

鈴木や原田などの聲を後に聞きながら、私はきつと妻からの手紙が来たんだらう、討伐以来はじめてだからもうだいぶ長く手紙を讀まないなあ、と胸をはづませながら階段を上つて行つた。二階には古賀伍長の外に小隊長と分隊長の青木軍曹とがゐた。手紙は見當なかつた。

「お前にたのみたいことがあるんで、ちよつと呼んだんだが……」

古賀伍長が話しかけた。

「實はね、昨夜警備隊長殿がなくなられたのだ」

「えゝ？隊長殿が……」

「うん、討伐の時はあんなに元氣で指揮せられてゐたが、病氣をかくしてゐられたらしい。その無理がたゝつて急死せられたのだ。」

ところがこんな前線だから坊さんがなくて本部では弱つてゐる。それで、お前のことを思ひ出して、自分の小隊で坊さんはどうにかしませう、と言つて歸つて来たんだがね、御苦勞でもあらうが讀んでくれないか」

私は何時もにこにこしてゐられた警備隊長殿の温顔も、もう見られなくなつたかと思ふと父親の死以上に淋しく思はれた。戦地では人間の死は見なれてゐるが、死の淋しさはかへつて内地以上に切實に感じる。馬上豊かに颯爽と部隊の先頭に立つて指揮せられてゐた討伐の時の雄姿が臉にはつきり浮んだ。

「はあ、喜んで参ります」

「そうか、いやあ、これで安心したよ。日本人はどうしてもお經を讀んでもらはないと、死にきれないやうに思へてね……。隊長殿もさぞかし喜ばれることだらう」

小隊長殿がしんみり言はれた。

「可愛い、部下の讀經だ、これ以上の回向はないよ」

古賀伍長がほつとしたやうにつぶやいた。

その時、青木軍曹が何思つたのか、

「お前はお經が讀めるのか？」

とだしぬけに言つて、私の肩をたゝいた。

「坊主ですよ！」

「あはは……。失敬、失敬。兵隊の恰好だけだとお經なんか讀めさうに見えないからな、

つまらぬことを言つた。失言、失言」

青木軍曹は黙然にあやまつた。

「それでは小隊長殿と十五時に本部まで行つてくれ」

私は降りて来た。下ではみんな首を長くして手紙を待つてゐた。

「俺のはなかつたかい？」

吉田上等兵が睡さうな眼を無理にあけて訊ねた。

「手紙じやなかつたんだ。警備隊長殿がなくなられたので、讀經に行つてくれとたのまれ



「たんだよ」

「なあんだ」

「がっかりするな、手紙どころじゃないぞ」

「いや、隊長殿のなくなられたのは

新兵所で聞いてゐたんだ。ほんとに惜しい方を失つたよ」

私は背嚢から袈裟と珠數をとり出した

「ずいぶん用意がいんだね。坊主は遠つたもんだ」

鈴木が横から覗いて笑つた。

「坊主の身だしなみだよ」「ふん、貴様

がそんなものを持つてゐるんじゃない、何時

戦死してもいいぞ」

「しかし、そう袈裟でもかけると貴様と言へなくなつたなあ」

原田が近寄りにくさうに眺めてゐた。こと／＼階段を降りてくる足音がして、青木軍曹と古賀伍長がやつて來た。

「やあ、ちゃんと持つてゐるな。それでは立派な坊さんだ」

「だが、服が汚ないな、そう／＼二、三日前わたつた不寝番用の新服を着て行け」

青木分隊長が古賀伍長に催促して新服をわたしてくれた。そうして、みんなが、今日だけは普通の兵隊じやないぞ、威張つて堂々と

同向して來いとはげました。

「そうさ、三界の大導師だからな」

私は新服を着ながら嚴そかに言つた。

「なんだ、その三界の大導師と云ふのは？」

「解らなきやい、よ、後で教へてやらふ」

私は本隊からはなれて第一線を警備しつゝ、淋しく戦死せられた隊長殿を、眞心こめて御同向申上げようと、傲然と言ひきつた。そして、なにか自分ながらたのもしき氣に充たされたのであつた。

(をはり)



松井大將と大島大僧正

「興亞觀音」をめぐぐる佛縁

— 本誌記者 —

湯の街、熱海伊豆山頂に二體の觀音像が安置されてある。その名も「興亞觀音」と云ふ。

二月二十四日、増上寺法主大島徹水大僧正の導師の下に開眼式が觀修される。施主は元中支派遣軍最高指揮官松井石根將軍。

松井將軍と大島大僧正との間にはこの觀音像をめぐつてゆかしい佛縁が結ばれたのである。

去る日、芝増上寺で大陸に散華した英靈の慰靈祭が觀修された當日、導師を勤められた大島大僧正と施主の一人松井大將とが會談されたことがある。

その時、松井大將は中支の攻略戦に名譽の

戦死を遂げた部下將卒の英靈に永く回向するため自分の新居、熱海伊豆山に觀音像を安置したいと考へてゐると話された。大島大僧正はそれを聞いて

「それは誠に結構なことである。しかし、觀音像を作るのであつたら、皆の人に拜まれるのであるからあなた流の觀音を作らずに、法に従つて作られた方がよろしからう」と話された。將軍は至極尤もなことと

「それでは、その觀音像についてはあなたの指圖に従つて作ることにしよう」と、これが名將軍と名僧正とを結ぶ機縁となつた。

松井石根將軍はもとく佛教信仰の厚い人である。將軍の副官をしてゐた牧次郎(相圓)少將が淨土宗に歸依して大島大僧正の得度を受けられ、大陸に英靈の巡拜回向に行かれたのも將軍の感化によるところ大であると云はれてゐる。

將軍は大陸の野に三軍を叱咤されてゐる頃から興亞の貴い犠牲となつた幾多の部下將兵の英靈及び、蔣政権によつて誤られたとは云へ勇戦して斃れた中國軍人の靈を永く回向したいと云ふ考へを胸中深く秘められておつたが、それがこの度の觀音像となつて顯れたのである。



將軍はその後、昨秋、秋禪を學んで大僧正を
熱海の別荘に招かれた。大僧正は西下の途次
熱海に立寄られて、將軍と共に伊豆山にのぼ
られ、觀音堂建立の敷地を見出されて、堂の位
置、構造等について意見を述べられた。
『將軍將兵の英靈だけを祭られるおつもり
か』
『いや、敵國軍人の靈をも回向したい』
『それならば、御位牌は日本のを左に、支那
のを右になさるがよろしからう。御堂は山の
上であるから凡て質素になさつた方がよろし
い。』
又、大觀音像は山頂の洞窟の中に安置

し奉る筈であつたが登山路から二ヶ所ばかり、
その洞窟を拜することの出来る箇所があ
るので、大島大僧正の發意で、その前に安置
し奉ることになつた。等々、堂の内部構造
から佛具等に就てまで細い注意を與へられ、將
軍は凡てを快く受け入れられた。そして日
本軍人の英靈のみでなく、支那軍人の靈をも
祭つた眞に新東亞建設の時代にふさはしい觀
音堂の設計は出来上つた。言葉は變だが劃期
的な觀音堂と云へやう。
安置する觀音像は陶器で、瀬戸の名工加藤
某氏が丹精をこめて作つたものである。扁額
は朝香宮様が御染筆遊ばされる。
宮様はかつて南京城外に皇軍將士の忠魂碑
を立てる計畫があつた時にその敷地を御檢分
遊ばされ、『支那軍人の碑も立てたらどうか』
と仰せられた、今その御因縁がこゝ伊豆山頂
にも結ばれたのである。
御堂は熱田神社の櫓の殘木を用ひ、簡素では
あるが總檜の立派なものが既に竣工し、天井
の壁畫はこれもまた大僧正の幹旋で堂木印象

壁畫が仕上げることになつてゐる。
斯様にして、將軍と大僧正とは數回に亘つ
て會談され、工事は着々と進行して二月廿四日
いよいよ開眼式を厳修する運びとなつた。
大僧正は云はれた。
『私も正装で式を行いますから、あなたも大
將の正装をして御出席下さい』
と。開眼式當日は朝香宮様を始め、奉り中
支那線に奮戦した松井將軍麾下の陸軍諸將、皇
族の方々が多數參列される。
松井大將はいまは參議をも辭され、僧形を
こそしないが、心に法衣を纏ひ、この堂守と
して英靈と共に餘生を暮すべく心を定められ
のたである。
聞くところによると、新居完成の二月十日
へ大森の自宅を引き擲つて伊豆山頂へ入二九
に轉籍の手續きをとられたと云ふ。
かくして、伊豆山に『興亞觀音』は松井大
將を施主として、大島大僧正の開眼によつて、
興亞の貴い犠牲者の英靈を永へに護つて、香
煙絶えることなき大靈場となるであらう。

にくまれ口ぐち

中野 尅子

□ 悪評を立てられるようになったら、ソレだけ世の中へ乗り出したのだ。好評が流れるようになったら、もう下り坂だ。

□ にくまれ者、世にはばかると云ふが、世にはばかる一人のにくまれ者によつて、世はどれ程矯正されてゆくかわからぬ。下手な悪人になるより、大膽な悪人になれ。

□ 戦死した人が得か、生き残つた者が得か、どちらも得ですネ、此の世に損な事は一つもナイ。

□ 必ずしもフォークとナイフで喰はねばなら

ぬと云ふ事はない。手振みでも喰べられるぢやないか。コレを非常時といふ。尋常の事を尋常の手段で運んでゐる時は、平和な時なんだ。

□ 敵に勝つより味方に勝つ方が六ツかしい。敵によつて崩されるより、味方によつて崩されてゐる事が先きだ。

□ 使ふ人が偉いか、使はれる人が偉いか。使ふ人が偉い内は事業は進む。使はれる人間の方が偉くなつたら事業は停る。

□ 金は百圓あつても足らぬ、千圓あつても足

らぬ——といふことは、金は百圓でも足つてゆく、五十圓でも足つてゆくといふ事だ。實は金できめるものでなく、きめる心できまるのだ。

□ 人間は、いつになつても抱かれて安らぐ愛のフトコロを希ふ。此の意味から、人間は「永遠の子供」だ。

□ 自分を鑑ずるものは、自分の先輩でなく、自分の後輩だ。それ故、常に「後輩に學ぶ」眞鍮味のない者に、餘命なし。

□ 一語、旨味のある文は戀文だ。一語、旨味のない文は電報文だ、一字いくらで數へてゐるからだ——。

□ 一升の辨に一升しか入らぬと云ふが、今の世に、一升の辨に一升入つてゐる人間がどれだけある。大抵、目の切れる人間や、目の切れる鹿が多い。



多摩川吟行

太田 耳動子

銀杏の葉あちこちとして散りかゝる
 落葉かろく掃かれて地ののこりけり
 落葉来て木の根はかたし踏みしむる
 ロケーションの人垣そこに根木打
 山茶花のいまが盛りのわびしけれ
 散りのこる桃の葉なれや垂れさがり
 松籟に眼つむれば吹かれゆく
 松籟のたゞまり落ちて谷くるゝ

□ 悪も仕事も、下手な内が上手だ、上手にやるようになったら下手だ。

□ 人間も商品の一つだ。買被つてはいかぬ。

□ 金は、無い内は餘るが、有るようになると足らぬばかりだ。

□ 怒るような事ではダメだ。而し、怒れぬような事でもあかぬ。

□ 頭は、下げ過ぎてても馬鹿にされる。上げ過ぎてても馬鹿にせられる。下げず、上げず。下げる時には下げ、上げる時には上げる——たゞソレだけの事だ、人生の勉強も。

□ 今更、矛盾を見出したように騒ぐのは愚だ。矛盾は此の世には初めからの付き物だ。矛盾が矛盾の儘で、矛盾でない事を發見してこそ、發見の値打がある。ソレが宗教だ。

戯曲
 祇園
 精舎の恋

時 所 人

佛陀在世の頃

祇園精舎とその近所

佛 陀

舍 利 弗

目 連

阿 難

サンカターヤ

ヴェーサ

チンチャー

ジャームサエーダ

その弟子

同

同

佛教信者

同

バラモンの女

その師

その弟子

其の他佛教信者多勢



復藤一郎

第一幕

第一場 ジャームサエーダの家

幕開くと、ジャームサエーダが、その弟子A、Bと何か、話してゐる。正面には、祭壇をしつらへ、火の神を祭る。

ジ「もう、何時頃であらうかの？」

▲「もう、かれこれ、お午にもなりませうか」

ジ「ふーん。今日は亦、一人も、お参りの方が見えぬではないか」

A、B、顔を合せて、困つたと云ふ表情。

ジ「サンカターヤ殿は、近頃、どうして居られるか、御身達は知ら

ぬか？ 以前には、随分熱心に、参られたものじやが……」

弟子達、再び困惑の態。

ジ「さう云へば、サンカタヤ殿だけではない。此頃になつて、見えられぬ方が随分あるようじや。前に較べると、三分の一、いや、もつと、少いかも知れぬ。一體、どうしたことじや……」

A、決心した様に、一膝にじり出る

A「お師匠様。その、サンカタヤ殿の事でござりますが……」

ジ「何か、耳にしたことがあるか？」

A「はつ。あの、先日、私が、用事がありまして、祇園精舎の近くまで参りました。」

ジ「祇園精舎？ ゴータマのか？」

A「左様でござります。その、祇園精舎の近く参りました節……（後は言ひ難くさうにして、そつと、額を、手の甲で拭ふ）」

ジ「どうしたのじや？」

A、Bの方へ、眼くばせして、Bの膝をつく。一気に、

B「サンカタヤ殿が、祇園精舎から、ゴータマの弟子のアナンと話しながら出て来るのを見たさうでござります」

ジ（愕然として）「何！ ゴータマの所から……？ さうか！ そんな人間とは思はなんだが（始めの驚きが、怒りに變る）。之と云ふのもみんな、ゴータマの爲じや。いまくしい奴め！ 一體、どうしたら、この腹が癒えよう」

膝の上で拳を握り、身震ひする。師の激怒を見て、うなだれてゐた弟子、この時、頭を上げる。

B「その事について、我々が、かねて、考へてゐたことが、ござりますが……」

ジ「何？ ゴータマを、こらしめる方法があるか？」

A「さあ、こらしめる……と云ふことになりましたか、どうかは判りませんが、とに角、ゴータマの信者を奪ひ取る方法がござります」

ジ「奪ひ取る？ それは素張りしい。して、その方法は？」

A「その方法ですが（Bの方を一寸、見て）餘り立派な方法ではありません。」

ジ「中傷か？」

B「まあ、そんなもんです」

ジ「駄目だ！ そんなことは、御身等に言はれるまでもなく、今までに、何度も、やつて見た。（弟子達、顔を見合わせる。ジャーヌヴェーダー、失敗つたと云ふ面持ち。直ぐ、苦笑で打ち消して）ハ、ハ、ハ。御身達だから、あからさまに打ち明けるのだが、生優しい中傷では、ゴータマを傷つけることは出来ぬぞ」

A「それは、私共も、よく知つて居ります。だが、私共の考へたのは、女人を以てする中傷です」

ジ「女人？」

B「さうです。ゴータマは常々、快樂を貪つてはならぬと教へてゐ

ます。だから、その遊を行つて、女と快樂を貪つてゐるかの様に見せかけるのです。」

ジ「うまく、行くかの？」

A「行きます。大丈夫です。中傷が失敗するのは、それが單なる言葉だけの中傷だからです。私達の考へたのは、もつと、徹底して行爲に現はします。場合によつて、事實、快樂に耽らして見せます」

ジ「心細さうに」どうだかな。第一、そんな女子が、あらうかの？」

A「あります。信者の中に。」

ジ「信者の中に？ 誰ぢや？ まさか、チンチャイではあるまいな？」

A「チンチャイです」

ジ「烈しく」あれは、いかん。斷じて、いかん！—A、B、二人、顔を見合せて苦笑する。ジ「ヤーヌヴェーダ、自分の語調の趣しいのに心付き、苦笑して、語調を柔げる」いや、他になければ仕方がないが、あれでは、餘りに犠牲が大きい。第一、あれが、たとへ、計事にしろ、ゴータマに近づけば、今、残つてゐる信者達も、一緒に、ついて行つて了ひはせぬかの？」

A「尚、宜しうございます。それだけ、効果も大きい譯です。人には誰でも、嫉妬と云ふ物が、ござります。美しい、慕はしく思つてゐるチンチャイが、ゴータマに犯されたと思へば、その慕慕が深けれ

ば悪い譯、またゴータマを敬じて居る譯、彼等は、ゴータマを憎むこととござりませう」

ジ「未練らしく」それより他に方法がないかの？」

A、B「ありません」

その時、舞臺裏で、バラモンの聖歌を唄ふチンチャイの美しい聲が聞えて来る。

チンチャイの唄

ミトラよ！

死せし時は神に供養せしものを首位にあらしめよ

アーデトヤよ！

A「あッーチンチャイだ」

B「チンチャイが來ました」

唄「彼は御身の意志によりて禮拜せり」

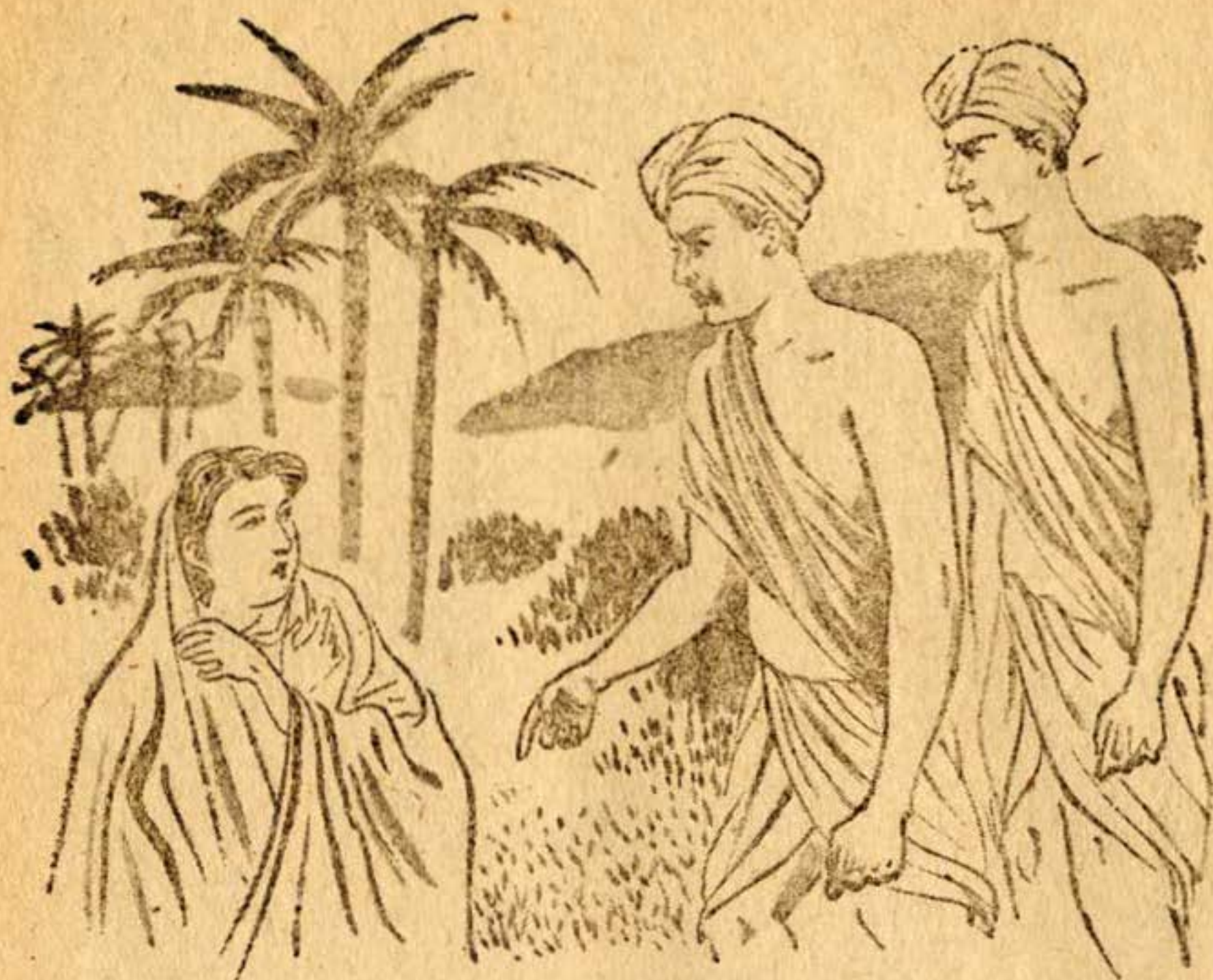
ジ「どうするのだ？ えッ？」

A「さうだ。とに角、心配さうな顔をしてゐて下さい。憂鬱で飯も旨くないと云ふ風に……。さうです、さうです」

唄「彼は御身の加護の下に」

唄、段々、近づいて来る。三人、尊、うなだれて、心配さうなポーズ。時々、溜息をつく。唄、中斷すると、チンチャイ、下手より登場。快活に、

チ「お匠様。今日は。」



三人とも答へず。吐息をつく。ナンチャー不思議さうに、其の場の
光景を見守る。

暗転

第二場

祇園精舎から舎離城へ通ずる森の中の静かな道。上手の方が精舎の
氣持ち。奥の方は、小川が流れてゐる。

ナンチャー、上手から登場。何か、考へながら出て来て、小川の邊
にたゞづむ。小川の流れを、じつと見ながら、吐息をつく。

チ(獨白)「物は皆流轉す——執着すべき我はなし……何と云ふ賢
い言葉であらうか。靜かに聞いてゐると、何か、斯う、引きこまれ
て行く様な氣がする。その上、あの、氣高いお姿……自分で自分が分
らなくなつてしまふだ。ゴータマの方が正しいのであらうか、あゝ分
らない。でも、今になつては、どうしやうもない。師を裏切ることは
出来ぬし……あゝ、ゴータマ！ ゴータマ……」

憫ましげに、右手の掌で額を、揉む様に撫でながら、思案に沈
む。

下手より、サンカターと、佛教信者、ヴェーサ、何事かを話した
がら登場。

サ「全く、世尊のお話を承まはつてゐると、一枚一枚、迷の皮が、
はぎとられて行く様な氣がするではないか——
ヴ「その通りじや。自分の身の淺ましさが、餘り、ありく」と見

えて来るので、空恐ろしい氣がするわ。」

サ「ハ、ハ、ハ。その言へば、この間、お主の召使にであつたが、此頃、主人は大變に優しゆうなつたと言ふて、喜んでおつたぞよ」

ヴ「ハ、ハ、ハ。優しゆうもならう。自分の醜きを賣める氣にもなれ
まいて……」

サ「ハ、ハ、ハ」

チンチャー、本能的に、身にひるがへして木の後に隠れようとするが、何事かに思ひ當る様に、唇をかみしめ、思ひ止る。二人、チンチャーに氣付く。

サ「チンチャー殿ではないか。今頃、こんな所に、何をして居られる？」

チンチャー、默然として、うなだれる。

ヴ「御身は、この女人を御存じなのか」

サ「知つてゐると云ふ譯ではないが、俺が、まだ、ジャーヌヴェー

ダの所へ行つてゐた頃の同門じやつた」

ヴ「フーン。一寸。サンカターヤを側の方へ連れて行く」御主、知

らぬのか、あの女を？」

サ「知らぬのかとは？ 何を？」

ヴ「あの女じやよ。問題の女は。」

サ「何？ あれ？ あれか？ (驚いた様子) 何時も、夜、我々が精舎から歸る頃、やつて来て我々が朝、お詣りする時、歸つて行く女と

云ふのは？ ふーん、チンチャーか！ (つか／＼とチンチャーの前へ歩み寄り) チンチャー殿、御身、一體、何處から歸つて來られた？」

チ「あの……」(サンカターヤの驚しい語調に驚いて、直ぐに出ない)

サ「精舎からであらう！ いや、それに、遠くない。」

チンチャー、決心した様に、やゝ、絶望的な語調で、

チ「精舎からでは、いけませんの？」

サンカターヤ、冷かな眼に見つめられて少し、どきまぎする。

サ「いや、そんな譯ではないが…… (少し、皮肉に) 随分、お早い

お詣りだと思つて」

チ「ホ、ハ、ハ。お詣りしたのは昨夕ですわ」

ヴ「何？ 昨夜？」

サ「では昨夜は？」

チ「え、精舎へ泊りましたの。」

二人、默然として、チンチャーの顔を見つめる。

チ「早く歸らうと思つても……」(恥かしさうな、しなをつくる)

サ「(驚かす様に) 一體、誰です？ 相手は誰です？ えつ默つてゐ

ては分らん。誰です、相手は？ 實に、けしからん。佛の弟子の中に

も、そんなことをする人間があるとは。早速、世尊に、お話し申し上

げなくては。誰ですか？ 藏陀ですか？ え、ハ、ハ。それでせう？ 彼奴

は大體、虫が好かん。出家のくせに、いやに、身を飾る。藏陀でせ

う？」

チ「いゝえ。巖殿様ではございません」

サ「では、誰です？」

チ「誰だつて、いゝではありませんせんか」

サ「じやア、何だかな？」

チ「馬鹿に、しつこいのね。誰だつて、そんなことは貴君達の關したことはないでせう？ 馬鹿々しい。チンチャーは、そんな、弟子達に身を許して堪るものですか」

キ「何？」

(同時に)

ダ「何だつて」

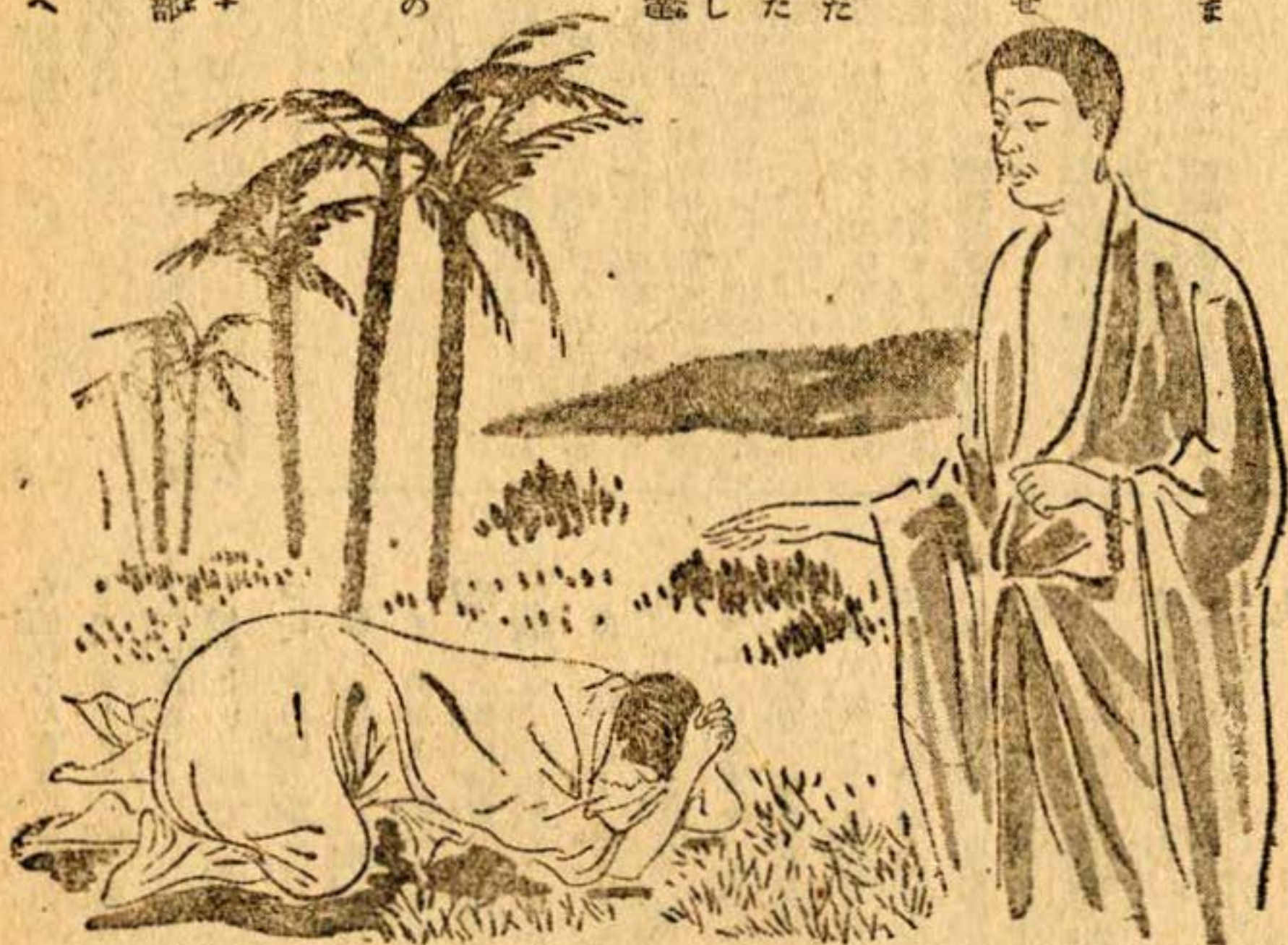
サ「では、では、世尊だと云ふのか？」

チ「御想像に、お任せします」

サンカタヤー、姪まじさうに、チ

ンチャのやゝ、隆起して見える腹部を眺める。やがて、憎々しげに、

サ「ふん！ 子供まで、こしらへ



やがつて。第二のラゴラか？ 面白くもない！

ダ「サンカタヤー！ お主の様に怒つてはいかん。まだ、この女の云ふことが、事實だか、どうだか、分らないではないか？」

サ「いゝや！ お主は、この、チンチャーと云ふ女が、どんな女か知らぬからだ。誰も、この通り、綺麗だが、心もとても、潔白な女で、人が指さしても、汚らばしいと言つて怒る位の女だつた。そんな、嘘が云へるものではない。それに、(腹を指して)あれが、何よりの證據だ。不品行な事をしておいて、相手の男の名だけ隠したつて始まらないさ」

ダ「しかし……」

サ「しかししも羨もあるもんか。俺は黙る！ 口でばかり、旨い事を言ひくさつて、する事と云へば、この通りだ。あゝ、朝から、すつかり、不愉快になつてしまつた」

大股でト手へ去る。ヴェーサも、後を追つて入る。チンチャー、二人の後姿を、疲れた様な眼差しで見送る。

チ「あゝ、また、罪を一つ、重ねてしまつたへうなだれて、一つの罪は、次の罪を作る。あゝー 私は、私は、自分の作つた罪の世界か

西園寺家へおくる

現有上人の養生法

九十二歳の高僧を以て興津坐漁莊でひたすら療養をつゞけてゐられる西園寺公は淨土宗西園寺の檀徒として淨土宗とは因縁淺からざるものがあり、知恩院からも細井文書課長が興津に御見舞に参上した位である。主治醫の勝沼博士は老公の診療にあたりと共に長壽の人々の日常や病氣の状態等を参考にして、老公の養生にそなへることになり、二月始め西園寺家から知恩院への來信で名古屋帝大勝沼博士は富方公爵の診療に心を用ひ居り候ため長壽を保たれたる方の病症状態をも研究致し居り候が故に故知恩院門跡親下の御病床日誌或ひはその體溫表識拜見するを得ば甚だ好參考たるべく候 (下略)

と百五歳の高僧を保つて遷化された故山下現有管長の長壽に就ての養生法を問ひ合せて來たので本山では山下管長愛弟田中俊興氏からその養生状態と病床日記をとりよせて西園寺家におくることになつてゐる。

ら逃れることは出来ないのだらうか (泣き伏す) 慟哭の合間に、ゴータマ、ゴータマと叫ぶ聲のみ、はつきりと聞える。壁に解けて、肩の上に崩れる。

上手より、佛陀、靜かに現はる。泣き伏してゐる、チンチャーを見つ、その傍へ歩み寄る。肩を軽く叩く。

佛「妹よー 妹よー」

チンチャー、顔を上げる。佛陀の顔を見るや、俄破と、はね起き、恐ろしい物に出會した様に、蒼白になつて、後ずさりする。胸は悶しく波打つ、ゴータマ、ゴータマと呟く。

佛「妹よー 御身は何を驚き、苦しんでゐるのか? (一歩前へ出る。チンチャー退る) 妹よ。御身の苦しみを私に言ふがよい。」

チ「いけません。いけません。あゝ、苦しいー 一體、どうしたら…… (頭髮をかきむしつて悶え苦しむ)」

佛「妹よー (聲にも、眼差しにも、一層の優しさが加はる)」

チ「いゝえ、いゝえー 私は悪鬼です。夜叉ですー」

佛「妹よー 自からを悪鬼と責めさいなむ者が悪鬼であらうか。

妹よー (近寄る)

チ「いけません。傍へ寄らないで下さい。(身悶えする) あゝ、正ひさうだ、死にさうだ。」

頭髮を、かきむしりながら、走り去る。佛陀。憐れみを湛えて見送る。

別時念佛修養會案内

「淨土」會員の篤信の方々が、實際に念佛修養をしたいと熱望せられるので、特に左記の通り念佛修養會を催すこととなりましたから、是非萬障御一排御参加下さいますやうおすゝめ致します。

記

一、場所 静岡縣駿東郡御殿場町仁杉大乘寺（富士山麓）

順路 上り列車ハ沼津驛乗替へ。下り列車ハ國府驛乗替へ。御殿場驛下車。乗合バス須走行大乘寺前下車。

主催 法然上人鑽仰會

一、期日 四月十七日午前中集合（大乘寺）

四月十七日午後ヨリ開始、廿一日（日曜）夜終了、四月廿二日朝解散

（御都合に依り中途より御参加も可）

一、講師 中村辨康先生

一、會費 實費金五圓（但し中途参加の方は一日金壹圓宛）

一、持物 木魚持參のこと。

毛布御持參有らば尙ほよろし。

一、申込 法然上人鑽仰會事務所へ四月五日迄に申込まれたし。

修 養 別 時 間 割

十七日	五時半	集 合		七時	八時	十時	十一時	十二時	一時	二時半	三時半	四時半	五時半	六時半	八時	九時
十八日		念 朝		念 お		念		中		念 お		念 入		夕		念 座
十九日		佛 食		佛 話		佛 食		佛 話		佛 浴		食 佛		談		
二十日		佛 食		佛 話		佛 食		佛 話		佛 浴		食 佛		談		
廿一日		佛 食		佛 話		佛 食		佛 話		佛 浴		食 佛		談		
廿二日		佛 食		佛 話		佛 食		佛 話		佛 浴		食 佛		談		



筆 隨

乞食

松原敏夫

隣家に六十歳位の汚ない装をした男が毎日のやうに來た。ぼろぼろの外装を着て、それを細紐で結んでゐた。その細紐は時には紅色を帯びてゐる事もあつた。他所から貰つたもの或は路上に落ちてゐる品を構はず使用するので、不似合な女の物を纏ふらしいのであつた。帽子は案山子の冠りさうな烏打帽をかむつてゐた。

彼がU村の相當の農家の産れである事、結婚して子供さへ設けてから、他の女に心を奪はれて出奔し、やがて其の女人にも逃げを打たれ、諸國を放浪した擧句、老ひさらばへて歸國したが、すでに妻には夫と言ふべき男が出来て居り、子供は大きくなつて居つて彼を家に入れなかつた事。それから乞食同様にして現在迄暮らして來た事——。それらを知つたのは最近だつた。隣家は遠い親戚に當たるのであつた。

乞食では無い。」と主張するのだつた。私は外出してゐた。妻はあやまつたが彼は諸かなかつた。別隣の奥さんが彼の高聲を聞き、見かねては入つて來て、あなたは私の家に飯を呉れと言つて來たので呉れた事があつた。それは乞食の行動では無いが、乞食と言はれても仕方がなからう。」ときめつけた。彼は理に負けて引き下がつた。それがきつかけになつて、妻は彼に時々飯を呉へるやうになつた。彼は確に通例の乞食とは異つて居た。呉へた飯の御禮に、子供にグリコを買つて來たりした。又時々新鮮な菜つ葉等を持つて來て呉れた。彼は決して錢を乞はなかつた。噂によると幾許かの郵便貯金を持つてゐた。時折他家の雜用を手傳つて幾分かの勞賃を得てゐるらしかつた。家でも私が不在で人手の無い時等に一寸した使を頼んだりしたが、そんな時には彼は堂々と縁側へ廻り、妻を相手に昔話をしたりした。彼の左う言ふ時の態度には、自分にはその權利があ

ると自負してゐる様子が見受けられた。左うで無い時、只食事を貰ひに來た時には、こそと勝手口に現はれ、惺惺として去つた。

に雇はれも能事が擧がらなかつた。近所に家の女の子の友達で磯ちゃんと呼ぶ女の子の家があつた。其の家で彼を草むしりに雇つた事があつた。磯ちゃんの父は玉川砂利の商人だつたから職業上言葉がぶつきら棒だ。外から歸つて來て、

れから二三日と言ふものは、
「磯ちゃん。」と呼ぶと、「存じませぬッ。」だ。
「磯ちゃん。」「存じませぬッ。」
私達は大笑ひした。

私は早朝に散歩する習はしだつたが、時々、町はづれの用水縁で、U村の方からやつて來る彼に會つた。彼は年齢の割に健脚でツカツカ歩いて來るが、いつも私を見たか見ないのか分らぬやうな表情をして私の傍を過ぎた。

「何だ此の草のむしり方は。誰がやつたんだ。」と奥さんに言つた。本人は物陰でそれを聞いてゐた。間も無く磯ちゃんの父は仕事場へ行つた。磯ちゃんは家の子と遊びに夢中になつてゐた。奥さんが磯ちゃんを呼んだが返辭をしなかつた。で、奥さんは磯ちゃんが何處へ行つたかを、草むしりの残りをやつてゐる彼に訊いた。

「あ、さうでした。」妻は言ふのを忘れてゐたと言つて、彼が世田谷の方の或寺の墓守りに雇はれた事を談つた。何でも大分前から頼んであつたのが、今度前の墓守が死んだので採用されたのだ。隣家の主人が保證人になつた。

一度は黙つてそのままに引つ返したりした。私は通りすがりに會ふ彼の硬張つた表情をチラと見て、彼は私を憎んで居るかも知れないなと思つたりした。だが最近では私に朝の挨拶をするやうになつてゐた。

「磯ちゃん？」「存じませぬッ。」
彼はかしこまつて、だがぶりぶりした顔で左う答へた。さつき磯ちゃんの父親が言つた言葉が餘程に彼の自尊心を傷つけたらしいのであつた。

「それはよかつたな。」
私は嬉しい氣持がした。彼は安らかに餘生を送る事が出来るだらう。私は妻にその寺の在りかと名前を訊いて置くやうに頼んだ。氣が向いたら一度、それとなく訪ねて見ようと思つたのだ。

妻は何時のまにか彼を「小父さん」と呼ぶやうになり、残飯は保存して置いて彼の到來を待つやうになつてゐたのだつた。

それを磯ちゃんと家の子は聞いてゐた。それを磯ちゃんと言つた。

それから十日ばかりたつて、私の外出中に彼がキヤラメル等の土産を持つて尋ねて來て呉れたさうだつた。

何と言つても彼はもう老年だつたから難用

それ

それ



筆 隨

舊師きゆうしにおくる

植村 諦聞

御師匠様

さうあなたのことを心の中に呼んで手紙を書きたいと思ふ時は、何時も私の生活と心境が一つの轉機に立つ時でした。あなたのお膝元を離れてから、滅多にお便りも差上げず、ひたむきに自分の勝手な道ばかり走つてゐる私も、その道が突然行き詰つて方向が分からなくなつたり、自分の歩む力を失つてくづをれてしまつたりした時は、眞先に想ひ出し、すがり着くのはあなたの御でした。父が死んでから全く天涯孤獨の境におちてしまつた少年の日の私を拾ひ上げて、温かな愛の手で、人生の眞實と生きる力とを教へて下さつたあなたを、若き日

の情熱と理想の故に捨て去つて飛び出してしまつた私を、一言の叱責も、恨みもお持ちにならずちつとだまつて見守つてゐて下さるあなたの無言の愛情の中には、總ての物の成り行きを明かに知り悉し、その故に總てを肯定し、赦して、然も人間の小さな力ではどうにもならぬ人それだけの悲しい宿命の道を歩いて行かねばならぬ人間の寂しい姿を、一ばいの慈悲をもつてじつと見守つてゐて下さる、たとへ様もない廣い、あらかな世界がのぞかれるのでした。もうどうにもならなくなつた時あなたを想ひ出すと、その世界の廣さと安らかさが傷ついた私の心を何時もしつかり抱きとめて、そ

の傷口を洗ひ清め、直ぐ立ち上る力を與へて下さるのでした。あなたのお膝元を去つてから、そんな時が幾度もありました。然し今度は、私はそれらの時とは全く違つた心境でこの手紙を書いて居ります。

お師匠様、私がお便り出来ない境遇におちてからちやうど滿三年半、足かけ五年の月日が経過しました。そして今日私は全く新しい世界に立つて、潑刺たる元氣を以つてこの手紙を認めてゐます。その氣持は恐らくあなたにだけしか分つて頂けないのではないかと考へてゐます。世間的な常識から云へば、あの様な罪を犯して、あの様な生活に陥ちて歸つて來た私は、全く敗殘の

身であるにちがひありません。今の私には生活の方途もなければ、世間的な信用もなく、明日の生きて行く道すらどうなるかわからない様な境遇なのです。それなのに私は何の不安も焦燥もないばかりか、自分をとり巻いてゐる現實の苦惱の彼方に睨むい不變の世界が何時も輝いてゐる様に感じられるのです。これは決して、私の自慰でも、觀念的な幻想でもありません。又敗殘の自分を飾る敗け惜しみでもありません。そのことを分つて頂く爲に、あの禁囚の三年半の心の變化を少しばかり書いて見ませう。

事件が發覺して檢擧される時、私は少しの驚きも悔ひも感じませんでした。私の心は靜かでした。私は十數人の人たちの包圍の中で靜かに最後の夕飯を味はつてしたためました。私は何事も理想したことを行動に移さず、派生的な事件の飛沫を浴びて捕はれて行くのですから、自分の過去の行爲に對して勿論何の自負も誇りも持つことはできませんが、それかと云つて此の様な結果に立ち至つたことに對して愚痴を云ふ氣もありません。總てが必然な成行である様に思はれたからです。私は生れつきの小心者です。膽力などといふものは勿論ありません。然しこの様な場合に立ち至ると、直ぐ靜かな諦觀と覺悟ができるのです。これはたど／＼しい乍らもあなたの御誡教を受けた數年間の佛敎生活の賜物です。未熟な修業では、平生の生活を完全に規制する迄には至りませんが、何かの端的に立つと、潜んでゐたものが純粹に現はれるのですね。平生業成、臨終往生といふのはかういふ意味でありませうか。それから留置場で一年を過ごしました。三疊の部屋に少ない時でも六、七人、多い時は二十人にもなることがあります。そんな生活の中で一年も生きて來たのかと思ふと何か奇蹟的な氣がします。私はそこに入つた瞬間に、此の機會と場所を無駄に過ぎますいと決心しました。此處を道場として、何事かを擧まねば、此の座を立たずの決心をしました。隨所爲主

といふ言葉が先づ頭に浮んで來ました。菩提樹下に端座して居られる釋尊の端然たる威容が浮んで來ました。しかしそんな最初の甘い覺悟や幻影は、餘りにも強烈な留置場の、現實生活の前には忽ちに敗れてしまひました。私はそこであがき、のたうち悶えた擧句、一年の後に未決の獨房に移されました。今までの生活が餘りにも寒くあつた爲に、此處は又餘りにも靜か過ぎました。私は獨りになりました。此處で三年半を獨りで過ごしました。その間に時間が経過するにつれて、眞の自分といふものゝ姿がだん／＼とはつきり眺められて來ました。一日中獨りで端座してゐるといふ／＼の思念が次から次へと浮んで來ます。それが一年、二年、三年と経つと、およそ人間の頭腦で考へ得られる限りの、あらゆることは一通り考へます。過去の經驗の總て、その己が行爲の美醜善惡、喜怒哀樂、それは何といふ拙い、果かないものでありませう。私は再びそこで本生譚を讀みました

が、その時始めてそのほんとうの意味が分つた様に思ひました。あれは、人間の理想の世界に入つて来る、過去の生命の想ひ出であるといふことが實感を以て背ける氣がしました。私は又そこで一切經を通讀しました。そしてこの龐大な經典が、その表現が巧みになればなる程、その文字が多くなればなる程、一單なる思念と論理の遊戲に墮して行くことを感じました。生命の眞實直接を求めるものにとつて、それが如何に冗長退屈なものであるかを感しました。眞實を求めてつきつめて行けば、それはだん／＼釋尊の提示された極めて單純な原理へと歸納されて行くことを感しました。不立文字といふ言葉の意味もよく分る氣がしました。そしてこれらの龐大な一切經は時の流れと共に減ひることはあつても、この釋尊の示された單純な原理は永遠に減ひないと考へました。そして眞實を求めてこの經典を黒谷の法藏で幾度となく讀み返して居られる元祖上人の當時のお心持の

一端も實感できる様に思はれ、そしてこれらの思念と論理の遊戲を一齣して念佛の一行によつて、直に生命に直接せられた上人の教習を今更乍ら驚歎しました。然もたゞ／＼しい足を引づり乍ら、先聖の指示をそのまま素直に信ずることが出来なくて、その同じ道をもう一度歩いて見なければ分らない自分の頑な心を悲しまずにはあられませんでした。何も彼もやつて見なければ分らぬ人間、然しそこに又生命の神祕と意義がある様にも思はれます。同じ頃友人から、私と同じ様な罪を受けた數十人の人々の手記を集めた書物の差入れを受けましたが、それを讀んで、その人たちの體驗した苦惱の道を、又同じ様に自分が歩いてゐることを思つて、一層前を感じを深くしました。兎に角この様な生活の手で考へ盡し、悶え盡し、苦しみ盡して、我れと我れを投げ出してしまつた様な心持になつた或る朝のことです。私は、朝の體操を済まして雑巾を持つて、一心にそこらを拭いて、ゐたので

す。その一寸した瞬間に、突如として私の頭の中を、私が生れて以來経験した一切の事象が、パノラマの様に、同じ時間の長さの實感をもつて通り過ぎたのです。ハツと氣がついた時は私は、雑巾を片手に持つてそこに立つてゐました。それは時計の時間にする、恐らく十分に満たない時間です。その様な短い時間に、あんな龐大な、複雑極まる出来事が、どうして一度に展開出来たのだらうといふことは今になつても不思議です。然しその瞬間から私の心内がすつかり一變したことをはつきり感じました。どういふ風に變つたかと云はれても一寸表現できませんが、兎に角、すつかり何も彼も變つてしまつたのです。青いガラスで覗いてゐた世界が、赤いガラスで見ると、すつかり變つて見える様な、そんな感じでした。カントは既に時間と空間は人間の認識の形式に過ぎないことを論理的には證明してゐますが、それはどこまでも論理的推論であつて實感ではありませんまい。私は

それを實感した氣がするのです。この實感を
を得てから會て讀んだベルグソンの時間や
記憶に對する思惟が非常に天才的に優れた
正確なものであるといふ氣がします。兎に
角三年半の修業によつて、やつと私は御師
匠様が昔、言葉として教へて下さつた無我
や無常や、諸法皆空といふ言葉を實感とし

て把握して來たといふ確信を持つて再び世
の中に出てきました。勿論私の實感なるも
のが、もつと高い世界から見ればお話にな
らない淺薄なものかも知れませんが、淺薄
乍らにも只論理がなくて實感として把握で
きたといふことは何よりも大きなよろこび
です。これで私は過去の大きな犠牲を無駄

にしなかつたといふよろこびと、永いこと
師に叛いて勝手な行動をとつてゐた自分
が、その勝手な行爲の結果として此處に達
したといふよろこびを以つて、この手紙を
認めました。何も彼もみんな自分には必要
だつたのだといふ氣もします。私は今父子
相迎のうれしい情景を心に描き乍ら、遠か
らずお會ひして、もつとよくこの心境をお
話して、お教しを乞ふことを楽しんで居り
ます。どうぞ今までの様に師の宏大な慈悲
がきつと私を包容して下さいることを信じさ
せて下さい。



淨き友の會 信仰座談會案内

一、日時 來ル三月十日(第三日曜)午後六時

同廿四日(第四日曜)午後六時

一、會場 本郷區東片町七八橋本樂榮方

電話小石川四九七六番

一、講題 一紙小消息講義

一、講師 中村辨康先生

尚ほ廿四日は彼岸の最後の日に當りま
すので法要を替み會員の和讃御詠歌の奉
唱などもありますから御参加下さいまし

淨き友の會 幹事



童話

おちいさんと人形

にんぎやう

小林 正一

齋藤 清畫

おちいさんは何時も椅子にすわつてゐます。ご用達に行くときとか、お湯に入る時の外は一日中椅子にすはつてゐるのです。

その椅子がとてもおかしい形なのです。藤椅子のまはりをつつかり小さい布團や大きい布團でくるんでしまつて、からだの何處がさはつても痛くな

いやうにして、その中へおちいさんはすつぽりおさまつてしもふのです。足のところにはこたつがおいてあつて、その上に足をのつけてゐます。そのこたつの中は殆ど一年中火が入つてゐて、その上から毛布をかけて寒くないやうにしてゐます。まるで人力車にのつてゐるやうなかつこうです。

家中の人たちがたいみの上にすはつてゐるのに、おちいさんだけは椅子に腰かけて、ご飯をいたゞいたり、本を讀んだりするのです。私がそれではあんまりだと思つたので

『おちいさん、そんなに腰かけてばかりいたら腰がいたくなるでしよ?』と云ひましたら

『かうしてゐないと、からだが痛いのだよ』

と笑つてゐるのです。

『おちいさんは御病氣のせいでおすは

りになれないのだから、心配しなくて
もいいのよ」

とお母さんがいはれました。でもおち
いさんはとても元気がよくて、椅子の
上でいつも冗談を云つたり、私たちを
からかつたりして家中を笑はせてゐま
す。ですから、私はおちいさんが好き
なのです。一緒に外へ出て遊べないの
でこまりますが、家にゐる時の私とお
友だちの遊び場はたいがいおちいさん
の椅子のまわりです。

そんな時、おちいさんは椅子の上か
ら、私たちの遊ぶのをじつと見てゐて、
一緒になつて笑つたり、手をたゝいた
りして喜んでゐます。いくら騒いでも
けつして邪魔なやうな顔をしません。

お節句が近づいて來ました。家中し
ておひな様をかざりました。おちいさ
んによく見えるやうにと云ふので、ち

ようど椅子の正面にあたる
所に棚をつくつて、赤

い毛せんの上にお
ひな様をかざり
ました。だいい様
も官女も五人ばやし

もすつかり揃つて
ゐます。お供へも

のも、あられや菱

もちやお菓子まで

きれいにして、兩わきに

小さなぼんぼりを二つ置

きました。夕方になると

私がそれに火を入れま

す。それでまたひな段が

びつくりする程美

しくなります。

おちいさんは

『きれいだ、きれ

いだ、きれいだね』



と私の顔を見て赤ちゃんのやうに笑ひます。

そのひな段の中に、おちいさんの氣に入つたお人形があります。「汐くみ」と云ふお人形で、それだけ別に一つになつてゐるのですが、それはなんでも、お父さんの兄さんと云ふ人が私の初節句の時におくつてくれたのださうです。

その人はずつと遠くの方にある人ださうで、一度も家へ來たことがないのです。私は顔も知りません。でもいつかお父さんがお母さんにかう云ふ話をしてゐるのを聞いたことがあります。

『おちいさんはやはり兄さんのことが一番氣になるらしい。不孝な子ほど可愛い』と云ふが、それは本當らしいな』その親不孝なおちいさんの下さつた

「汐くみ」をかざる時に

『これはおちいさんのお氣に入りの人

形なのよ。でも、おちいさんはこれを見るという／＼なことを思ひ出しになつて、かへつてお身體にさはりはしないかしら』とお母さんは心配さうな顔をしました。

お節句の日にはお友達も呼んで家中で白酒をのんだり、お菓子を食べたりして、色々なお遊戯をして遊びました。

おちいさんも何時ものやうに椅子の上から私たちのすることを面白さうにながめてゐました。そしておしまひには『昔の歌をうたつてあげやう』

と云つて、おもしろい歌をうたつてくれました。一しうけん命に歌つてくれるのですが、でもその歌はお經でも讀んでゐるやうで、一寸も歌らしいふしがついてゐないのです。

『お年をとるとだれでも聲があゝ云ふ風になつてしまふのですよ。』

とお母さんはさう云つて

『おちいさん、おつかれになつたでしよ』

と聞かれました。

『あゝ、つかれた。とてもつかれたよ。』とおちいさんはため息をつかれまして。私たちはその様子があんまりおかしいので一つべんに笑ひ出してしまひました。

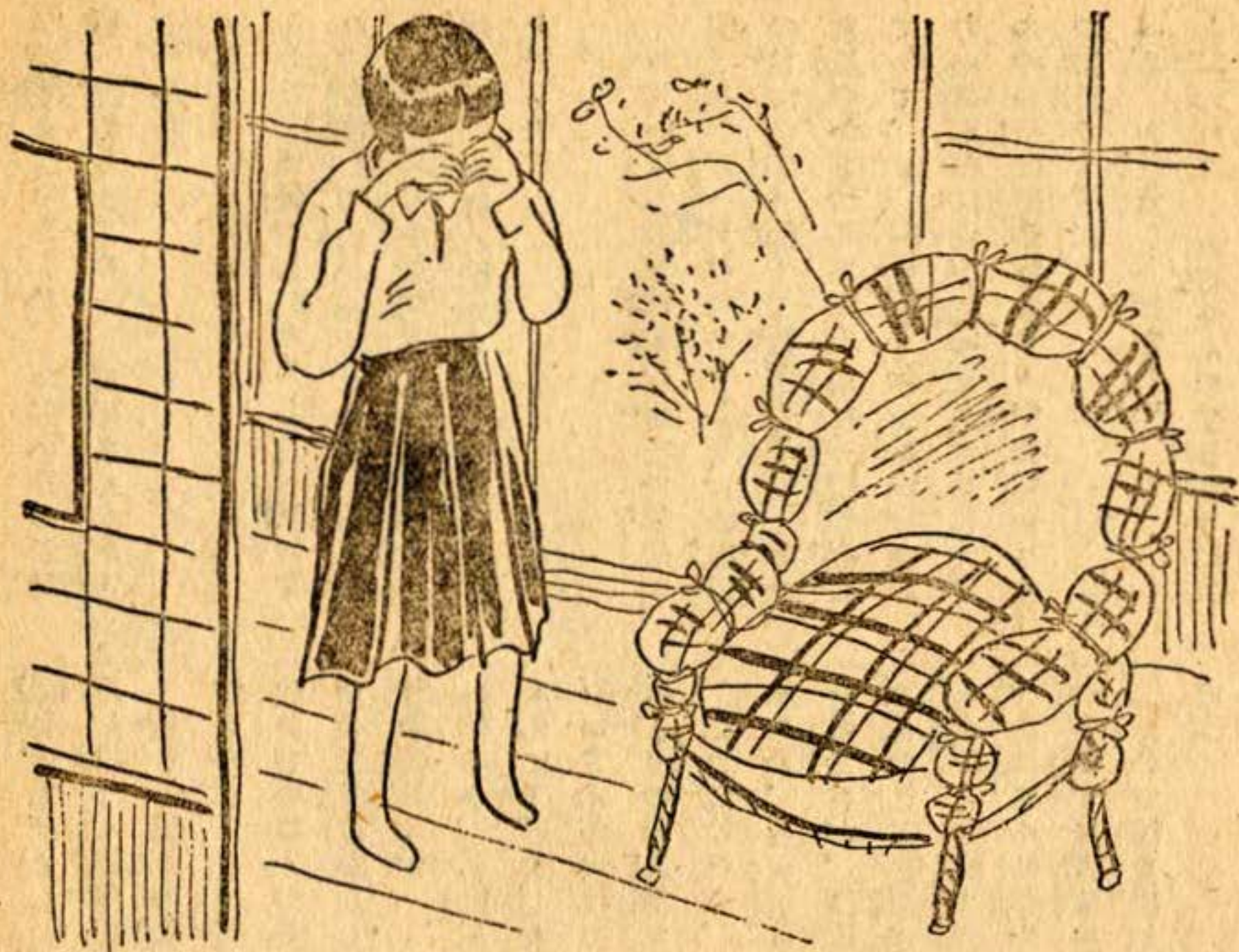
お父さんがお歸りになつてから、私がおちいさんのお歌の話をすると

『それは止めればよかつた。身體にこたへるといけない。』

と心配さうな顔をしました。ほんとにおちいさんは少しつかれたやうに見えました。

翌朝お母さんとお父さんがお話をしました。

『おちいさんは少しおつかれのやうで



すよ。昨晚おやすみになつてから、しばらくして、「あの沙くみの人形は片付けておくれ」とおつしやつたので、うしろの方へしまひましたが、今朝はまだ寝ていらつしやるのですよ。」

『少し具合が悪いらしいな。昨日の歌がいけなかつたかな』とお父さんはまた心配さうな顔をしました。

『今年はまだ馬鹿にあの人形を氣にしてゐるらしいね。少し弱つたらしい』

それから直ぐ女中に醫者をよびにやりました。

おちいさんはそれからずつと寝こんでしまひました。あの妙な形をした椅子はえんがはの隅の方に片付けられて、おちいさんのお部屋は病室になつてしまひました。

私は朝と晩だけそのお部屋に入つて行きます。

『おちいさん、おやすみなさい』と云ふと、

『あゝ、おやすみ、また明日ね』と云ふのです。「また明日ね」と云ふのは病氣になつてから云ひ出したのです。私はさう云ふおちいさんの顔を見てなんだか悲しくなりました。

或る晩、私はおちいさんの部屋が急にさわがしくなつたので眼をさました。少し心配になつたので、起き上

つて寝まきのまゝで、おちいさんの部屋へ行かうとすると、お母さんが廊下の外から

『出てはいけません』

ときびしい聲でしかりました。私はそれで我慢して寝てゐましたが、それから一晩中家の中をばた／＼と人が歩き廻つて、私は心配でちつとも眠れませんでした。

おちいさんのお葬式の日まで私はおばさんの家へ預けられました。お葬式の日にお家へ歸つて行きますと、おひな様のかざつてあつた所に祭壇が出来てゐて、そこに黒いリボンをかけたおちいさんの寫眞が飾つてありました。あの椅子に腰かけたまゝのおちいさんの寫眞です。

『さ、お線香をあげなさい』

と云はれて、お母さんのする通りにお

線香をあげました。そして大勢の人の前を通つて廊下に出ました。

見ると廊下の隅におちいさんの椅子があつたまゝで置いてありました。私はおちいさんがその上にすはつてゐないので急にかなしくなりました。その時お母さんが

『はるみ、お前の沙くみ人形はおちいさんに上げましたよ。お前の代りにおちいさんがつれて行かれたのよ。お氣に入りのお人形だから』

さう云はれて、私は一層悲しくなりました。お人形はちつとも惜しくはないのですが、椅子の上にゐないおちいさんのことを思つて、急に、おん、おんと大聲をあげて泣き出しました。

お母さんは私の頭をなでながら、きつと私がお人形さんをなくなしてしまつたので泣き出したのだと思つたのでせう

『泣くのちやありません。お人形はまた買つて上げますから』と云はれました。

私はさう思はれたのがくやしいのもつと大きな聲で泣きつゞけてゐました。

『そんなことで、いつまでも泣くのはありません』とたしなめるのです。

お父さんもおいでになつて『そんなに大きな聲を出して泣いてはみつともない。お人形はすぐ買つてあげるからもう泣くのはおよしなさい』お父さんにまでさう云はれて、一そくくやしくなりました。それで私は泣きながら、椅子を指さしました。かなしくて聲が出ないのですもの。そしたらお父さんとお母さんは黙つてかはるがはる私の頭をなで下さいました。(をはり)

連続漫画 白衣の勇士

三上 十坊



今迄気付か
なかつたこと
かみんな
ありがたく
幸福に思へ
て来た
これも戦地へ
行った
お蔭さ



この
水が
呑める
とは
なんと
ありがたい
ことか



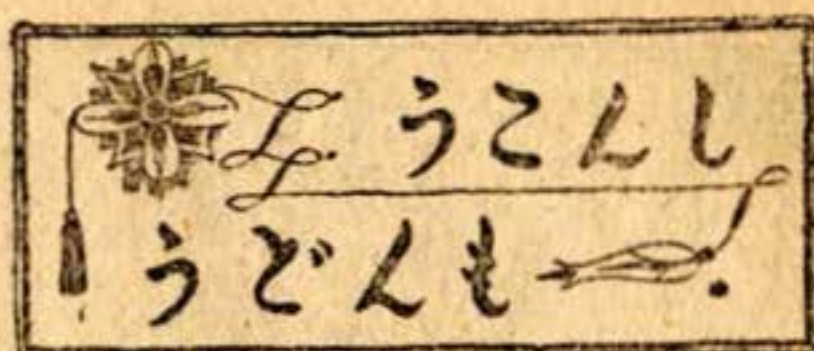
これは
僕の
戦友で
失明勇
士です



急にヒ真暗に
なつてさぞ
お困りで
せう
いや僕は世界
が明るくなりました
心の眼が開け
たのです



戦地では
安心して空
気を吸ふこ
とすら出来ない



中村 辨 康

法華經の一乗と他力

頓經の一乗との異同

二問

釋尊は法華經に未顯眞實法華一乘に於て眞實の教を説くと有り、佛は久遠實成の佛なるを以て其説に二三なく唯だ一あるのみ。然るに淨土教に於て彌陀の本願念佛を以て末法流布萬機普益他力頓教一乗と説く。佛説に相異の點有りと思ふ。

依て何卒左記の點御教へ願ひます。

一、淨土三部經の説時、及び法華經に勝れたる理由。

二、日蓮の唱題成佛は法華經の何れを根據とせるや。是れ佛の所説に契ひたるや。(淨土宗より及び通佛敎よりの説明)

三、法華經中(多分經の終りと聞く)餘の深法あり此經機を利すの一句及び愚者妄説此經の一句は何れに有りや。

我宗説明上の關係御教示願ひます。

(奈良・高田町・常光寺五座)

二答

四十餘年未顯眞實の言葉は無量義經說法品第二に出て居りますが、それは其前後を見ないと意味が通じません。

少し面倒ですがのべ書きにして見ますと

「諸の衆生の」性欲不同なれば種々に法を説き種々に法を説くこと方便力を以てす。四十餘年には未だ眞實を顯さず。是の故に衆生の得道差別して疾く無上菩提を成ずることを得ず。善男子。法に譬へば水の能く垢穢を洗ふに、若は井若は池若は江若は河、溪、渠、大海、皆な悉く能く諸有垢穢を洗ふが如く、其の法水も亦復是の如し。能く衆生の諸の煩惱の垢を洗ふ。善男子。水の性は是れ一なれども、江、河、井、池、池、溪、渠、大海各々に別なり。其法性も亦復是の如し。塵勞を洗除すること等しくして差別なれども、三法、四果、二道不一なり。

善男子。水は俱に洗ふと雖も、而も井は池に非ず、池は江河に非ず、溪渠は海に非ず。如來世雄の法に於て自在なるが如く所説の諸法も亦復是の如し。初、中、後の説皆な能く衆生の煩惱を洗除すれども、而も初は中に非ず、而も中は後に非ず。初中後の説文辭一なりと雖も而も義各異れり。善男子。我國王(善提憍)を起つて波羅奈野國の中に詣つて、阿若拘鞠等の五人の爲に四諦の法輪を轉ぜし時も、亦た諸法は本より來空寂なり、代謝して住せず、念々に生滅すと説き、中間こゝ及び處々に於て、諸の比丘並びに衆の菩薩の爲に十二因縁、六波羅蜜を辯説し宣説して、亦諸法は本來空寂な

り、代謝して住せず、念々に生滅すと説き、今復此に於て、大乘無量義經を演説するに、亦た諸法は本來空寂なり、代謝して住せず、念々に生滅すと説く。善男子。是故に初説、中説、後説、文辭は是れ一なれども而も義は別異なり。義異なるが故に衆生の解異り、解異なるが故に得法、得果、得道亦異なる。(中略) 善男子。我道を得て初めて起つて法を説きしより、今大乘無量義經を演説するに至るまで、未だ曾て苦、空、無常、無我、非眞、非假、非大、非小、本來生ぜず今亦滅せず、一相、無相、法相、法性、不來、不去なりと、而も諸の衆生、四相に遷されると、説かざるにあらず。善男子。是の義を以ての故に、一切の諸佛に二言あることなく、能く一言を以て普く衆の隣に應じ云々」

とあつて、説くところの内容は同じであるが、その表現が多少異り、また聞く人の方の眼もあいて居ないから、初ゆや中頃の時代に聞いて得た意味と、今聞いて得る意味と違ふのであつて、聞き手の心が開かなかつたから、今までのことを未顯眞實と云ふのであると説明して居るのです。

然らば今説の無量義とは何であるかと云ふに、同じ説法品に

「是の一の法門をば名けて無量義となす。菩薩無量義を修學することを得んと欲せば、當に一切諸法は自ら本來今、性相空寂にして無大無小無生滅非住非動不退、猶虚空の如く二法有ることなしと觀察すべし。(中略) 菩薩摩訶薩、是の如く諦かに觀じて懺悔の心

を生じ大慈悲を發して將に(衆生を)救拔せんと欲し、又復深く一切の諸法に入り(中略)一切の諸法は念々に住せず、新々生滅すと觀じ、復即時に生住異滅すと觀ぜよ。是くの如く觀じ已つて而して衆生の根性欲に入る。性欲無量なるが故に説法無量なり。説法無量なるが故に義も亦無量なり。無量義とは一法より生ず。その一法とは即ち無相なり。是の如き無相は相なく相ならず、相ならずして相無きを名けて實相と爲す。菩薩摩訶薩、是の如き眞實の相に安住し已つて、發する所の慈悲、明瞭にして虛しからず、衆生の所に於て、眞によく苦を抜く。苦既に抜き已つて復爲に法を説き、諸々の衆生を無量快樂を受けしむ。善男子。菩薩、若し能く是の如く一切の法門して義を修せん者は必ず阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得ん云々」と云ふのですから、何處に相違があるかと云へば、今までは中道とか空とか無相とか無我とか諸法實相とか云ふ「悟」其ものに中心を置いて説いて居たのだがその悟の境界に止まらずして、誠は煩惱の世界に飛び込み、煩惱に惱める衆生を救済すべきで、衆生救済の爲には「悟」の一法から機に應じ覺に應じて色々に説法しなければならぬ。だから「無量義」なのだ云ふのであつて、消極性から積極性に轉じたところが未顯であつた眞實を顯はしたものだとするのです。





また「一乗」とは法華經に説くところに依れば元來聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘と三乗の區別を立つべきものでなく、それは唯だ人々を導く手段として始めに説いたものであつて、導かれた處に於ては皆な「佛になれる」とする「一佛乘」に歸一すべきものであると云ふのです。

此意味が正しいとすれば法華のみが一乗ではなく般若も華嚴も眞言も禪も淨土も、皆な一乗教なのです。何となれば聲聞を目的とする譯でもなく緣覺を目的とするものでもなく、また何時までも菩薩に止

まつて居るものでもなく皆なそれ／＼佛を目指して居るものであり、皆なその道を歩めば佛になれるとして居るものだからです。然しながら舍利弗目連迦葉等の聲聞衆を始め、提婆達多の如き反逆者、摩訶波闍波提尼や耶輸陀羅尼の如き女性や、入歳の龍女の如き異人種にまで記別を授けて成佛の保證を與へる記事がその紙數の大部分を占めて居る法華經が、確かに一切の者を佛たらしめんとすることに必要以上の力を費して居る點に於て最も特色を發揮して居る經典と云はねばなりません。然も釋尊は此法華經に佛たる自分が世に出て來た所以は「一大事因緣」の爲であるとし、その「一大事因緣」とは衆生に「佛知見」を開示し衆生をして「佛知見」に悟入せしめんが爲であると説きまた人々は自分が伽伽の菩提樹の下に於て始めて成佛したと思つて居

るが、それは迹門の佛を見て居るのであつて、本當は本門の佛として久遠劫の昔からの本有實成の佛であり、八十入滅も僅りの入滅であつて、本當は無量壽常住の佛なのだから入滅することはないと説いたところにも此經の特色があります。

然し乍ら此の三の問題を検討すると、大勢の人々が授記せられる條件を見るに何れも専門的な修養を要求して居て私達凡夫には及びもつかない事ばかりであります。大智度論にも「法華等の證經には阿羅漢の受決作佛を説き、大菩薩能く受持し用ふ」と云つて居るやうに専門の修行者のみに云つて居るものです。

また佛の知見を開示悟入することは一應よいとしても是れ亦容易のことではなく、且つ知見とは佛の智慧二面の内智の一面だけを云つたものであつて、無量義經に現はれるやうな慈悲の方面を述べて居ないところに、上根上智の者にはよいかも知れないが下根下智の者には取りつく島もありません。然るに無量壽經には「大悲を以て三界を捨哀するが故に世に出興す」とあつて、如何なる者と雖も攝めやうとする爲に世に出たのであると云つて居ます。

また釋尊を迹門の釋迦本門の釋迦の二つに別けて本門の釋迦こそ本物である、手品の種明し見たやうなことを未顯眞實らしく思はせて居るのも少し何うかと思ひます。昔の人は幼稚であつたから、かうした云ひかたに感心させられたかも知れませんが、現代人に取つてそんな事は寧ろ日常茶飯の間にも云ひ馴らされて居ることです。私がよく

引く譬の時計について云ふならば、茲に時計があるとします。之は確かに述門の時計です。そして此時計はやがて入滅すべき時計です。然し乍ら此時計の本來的な原理即ち本門の時計は無始無終であり本有常住久遠實成のもので確かに永遠不滅です。時計には限りません。一切の事々物々がさうである如く、一切の佛もまたさう云はれ得る筈で、獨り釋尊にのみ限つたことではありません。一切のものに本迹二面があるのは當り前のことです。しかも本門が尊いか迹門が貴いか。本門を貴いとする人もあるでせう。迹門が實際的だとする人もあるでせう。然し事實は本迹不二であつて、不二なるものを無理に分けて價值を論ずるのは畢竟戲論であります。

また法華經全體の構成の上から云つて具體的な内容に富んでは居ませんが、大體の傾向としては主智的であり専門的であつて、一切成佛を説きながらも専門的修行を條件として居ますからまだく萬機普益とは云はれません。確かに無量壽經等の淨土經典の方が、佛の慈悲を力説して居るだけと同じ一乗教でも萬人に通ずるものであります。そして念佛と云ふ最も簡單なものを以て往生の正因として居るところに頓中頓の頓教たる所以もあると云はれ得ます。

此點になると日蓮上人は確かに瞶眼です。法華經中の一切の専門的條件を振り捨て、「唱題」と云ふ簡單なことを以て條件としました。お經に根據があるか無いかは今の處問題ではありません。法華經の何處を探しても「南無妙法蓮華經」を唱へれば成佛するなどと云つて居

るところはありません。然し題は其内容を含むものですから法華經八卷を引きくるめて「妙法蓮華經」の五字に包み、其全體の法華經を信じ歸依し尊敬する心を「南無」の二字に籠めて「南無妙法蓮華經」の七字を以て自分の信念表示をしたのですから、同じ法華經を正依の經典とする他の宗旨よりも確かに一頭地抜いて居るもので、聖道門的法華は茲に日蓮上人に依て淨土門的法華に進化したと云はれませう。

然し其行の形は唱題と念佛と同じやうな形式になつたのですが、一方は往生淨土を目的とし、一方は則ち成佛を主張するところに大きな相違があります。あなたはどちらが佛説として眞實かと云ふことを氣にして居るやうですが、そんなことは既に無量壽經で解決して居る筈です。それよりも此問題の方が私達に取つて大切です。私は昔しよく日蓮宗の人に聞いて見たものです。即ち「題目を唱へると何うして即ち成佛が出来るのですか」と。するとその答は色々ありました但其内最も簡單で當を得て居ると思つたのは「法華經は本門の本佛の中心生命であるから其中心生命の具現である法華經に南無する時、私達は本佛に融合して仕舞ふ。だから即ち身に成佛するのである」と云ふのでした。之が果して日蓮宗の正當な解釋か何うかは知りません。そんな穿索は私には用がありませんから、すぐ突込んで「ではあなたも現に成佛して居られるのですか」と





尋ねると「さうです、成佛して居ります」との答へだつたので驚いてしまいました。そこで私は「それは概念ではありませんか。然しあなたの生活事實が本當に佛として生活して居られるのでせうか」と尋ねるとまた驚きました。其返事が「さうです。現に佛として生活して居るのです」と云はれたではありませんか。餘りにも誇大ですからそれなりに私は黙つて居やうかと思ひましたが、其氣はまだ若い年でもありまた其人が餘りにも氣の毒に思はれたので「それは反省が足りないのではないでせうか。事實佛として恥かしくない生活をなさつて居るとは何うしても思へませんが」と云ひますと、其人もツイ笑つてしまひました。即身成佛なんて云つたつて全く實にかいた牡丹餅で、未だ會つて即身に成佛した人のあつたことを聞いたことはありません。之でもうハッキリして居るではありませんか。事實が何よりも證明しますから。

次にお尋ねすることを順次簡明に申し上げます。

一、無量壽經は阿闍世王の事件から推して法華經說法中に説かれたものであると云はれて居ますが、餘の二經のことは分りません。然し近代研究に依ると法華經の成立よりも淨土三部經の方があとであらうと云はれて居ます。その理由は般若の眞空説よりも

法華の妙有説が一段の進歩を示して居るが、法華の専門的なものよりも無量壽經の大众的なのが更に一段の進歩を示すものと判定されるからです。だから法華經よりも勝れて居る點はこの萬機普益と云ふことと、主智的な成佛主義でなく願を中心とする往生主義を取つて居ることにある譯です。椎尾博士の佛敎哲學にはもつと委しく色々の理由を擧げて論じてありますから御覽下さい。

二、根據はありませんが、理には契つて居ると思ひます。理由は前に述べた通りです。

三、初めの句の方は屬果品第二十二に出て居るもので「當於如來餘深法中示教利喜」とあるのを指したものでせう。あとの句は譬喩品第三に出て居り「無智人中莫説此經」と云ふのでせう。まだ此外にも「莫説此經」の句がもう一つあります。

少々長くなりましたが、かうした問題は地方に依ては随分必要があるかと思つて少し委しく申し上げました。まだ之でも云ひたりませんが、別の機會に譲るとして今は之だけでおゆるしを願ひます。

本欄への御質問は「はがき」で淨土編集部「信仰相談係」宛お送り下さい。誌上匿名は可なるも住所氏名を表に明瞭にお書き下さい。直接御回答はお断り致します。



朝鮮 盤江八年坊

たたかひの庭を偲びて小春日の齊垣に寄ればうぐひすの鳴く

評 聯動一如の境。心には遠く皇軍萬里の奮闘を偲び國歩の艱難を思つて、不安のあまり神社に祈念を捧げに來たのであらうが、神域は静寂そのものの如くひっそりしてゐる。折からの暖かさにうぐひすさへ鳴いてゐる。作者はこの光景を恍惚と樂しんで心の憂悶を忘れて立つた。大いなる神慮は人間の眼に知るところではない。調子も亦うつくしい。

松江陸軍病院 松江古志朗

病馬

耐へ耐へて生きんともかく生物の一すぢ心あはれまれけり

雨の宿舎にて

情ある宿のちるじよかまの火に乾して戎衣を兵に著せしむ

評 戦地におつての實感が尋い二首の中後者の方が佳い。

北海道 花田 昭 作

御佛にまかせまつれば身の涼し心

にかかる何ものもなし

評 同じやうな感恩の歌が他にも数首あつたが淡々と詠じた中に滋味のあるこの作者のを取つた。信仰の世界に住む人には何も不安も焦燥もないことを告げたものである。

長野縣 宮 澤 榮 子

わが生くる喜びを知り朝な朝な香を焚くなりみ佛のまへ

香川縣 荒 木 は ち

わが齡たけぬ花やぐ人ならでたとへて云はば消えがての雪

普通寺陸軍病院 尾 崎 正 男

隨處寸前愛妹の死にあひて

戦より家に還ればいと娘に近かれし母の一人哭きあぬ

中支派遣軍 新 田 正 治

鞍馬に食の細れる馬の脊を手もてなでつつわれ涙ぐむ

北海道 中 村 も ん

雪解水流るゝ岸の枯木さへ春に誘はれ新芽吹きけり

春淺し包ふ東風まだ訪づれで寒く鳴るなり峯の松風

大坂市 大谷みね子

わが夫子を國に捧げしこの日より彌陀の光に生くる身となる

會津陸軍病院 宮 下 光 雄

病める身も佛の御名を知りてより心あかるき月日とぞなる

東京 奥 山 政

念佛の力尊し煩惱も慈光に消ゆる淡雪のごと

京都市 水 田 七 郎

聞の座にありてしづかに澄み入れば歡喜の涙湧きてこぼるる

熊本陸軍病院 大久保秋穂

二とせの年をむかへぬ戦に拙く病みて初日を拜む

宮城縣 岡 鏡 老 史

眞心を神に佛にささげつつ朝夕いのる武運長久

靜岡市 飯 塚 ま つ 子

昨の世は燎野となりてたたずめば諸行無常のひびききこゆる

和歌山縣 松 尾 泰 道

一片の雲あらずして日の照れる小

春日和に小蟲とふ見ゆ

福岡縣 三 浦 壽 子

たらちねのみ心深しこの寒夜武運を祈り裸足詣りす

京 都 望 月 久 次 郎

朝な夕な湖の風寒からん遠きみ祖の奥津城どころ

海城陸軍病院 高 橋 邦 雄

女生徒は勇士の靈に捧ぐるや手に手に花を持ちて過ぎゆく

北海道 寺 田 眞 山

七十を経て奥山を越えくれば無爲の都の花ざかりなり

宮城縣 菅 原 仁 廣

皇紀二千六百年をことほぎて神に祈るは國のみさかえ

東京 藤 念

雪の中飯盛山に墓訪へば香のなびくもあはれなるかな

東京 三 野 輪 幸 昭

大いなるみ恵みたらし雨よふれ四十日雨なく今日も暮れたり

投稿規程

官製はがきに一回二句以内とし「淨土」編輯部併係あてに送ること。



吉田絃二郎氏

の隨筆を

小生も入會以來滿四年、その間淨土誌より光明へのお導きを賜り感謝致居候、尙吉田絃二郎氏の隨筆は淨土誌上なくてはならぬもの、一つにて讀者大多數同様感じ居ることゝ存候。「阪根翁」のことも結構にて存候が、何卒、右の完結をまたずとも隨筆も御掲載下さる様御願申上候。

(神奈川 森川門雄)

表紙に就て

續仰會發行雜誌淨土の事に付き一言タハコトを述べさせていたゞきます。先づ表紙圖案です。今年正月號は如何様な意味のあること

か淨土と上に出でゐるから信仰雜誌に見えますが、一寸あれでは内容も御同様と云ふことが直感的に感じられます。内閣情報部發行の寫眞週報の如く末の頁に表紙の説明を出してあります。表紙の圖意も切角の紙數ですし、無駄のないやうに、讀者に知つてもらふ意味に於て、あゝしたことは週報のみでなく國策的に見て第一表紙の繪から信仰の「かて」になることにもなります。みおや様の何物も意味なくして用ひないことを信者が知つたら、どんなにすばらしいでせう。圖案に知識を持つ人はいかにも理解もしますが、私達解せない者にとつては一目で好感の持てる繪の方が有難いと云ふ感じが出るのではないでせうか。一月號は私には幼稚にしか思はれません。まして圖意は信仰と關係が保つてないやうです。何のことはない、本には表紙が付物だから位にしか

見受けられません。

淨土と云ふ題字は現在のもので立派です。が別な考へとして總裁管長様の直筆のものを出すのも、もつと意味がありませう。表紙は毎月寫眞の類を選ぶのもいいでせう。(佛堂、佛像等割合に關係あるのもさもなくば毎月變る圖案系統の同じものです。まち／＼では駄目です。さもなくば確實な圖案で少くも一年は變へないこと。兎に角表にまでいつも變らぬ不退轉の氣があふれてゐる感じがなければたよりないです。やつとおつつけてゐる様では駄目です。

(千葉 布施とし)

中村辨康師に

「淨土」に於ける吉田絃二郎氏の「阪根翁のこと」の文章は出色の大名文、家庭内に談じて感銘新たなるものあり。中村先生によつて新らしき念佛信仰の行者は眞宗と

の相異點に明瞭の裁斷に苦しみつつあるが、絕對他力の清澤滿之師の我信念を讀みて、脈絡相通するものを發見いたし候が信仰いづれに重點を置くかの相違と存候

(愚鈍大語)

表紙の感じ

佛教日 殊にいかにもマツコ臭い陰氣であると少くとも現代若き男女間に解されてゐる今日、淨土誌の最も意義深き刊行でありたることは讀諸子の大いに認める所であらう。こゝに於てそのよりよき意味づけとして『若い人』の心を學ぶ事も全く無駄な事ではなからう即ち(誌の内容は問ふ迄もないが今は表紙にふれる事にする)『藝術は自然の完成である』——

レッシング

『藝術は有限の材料の中に無限の精神を宿すものである』——

シェリング



戦塵の中から

龍啓、紅葉を焚いて酒を温む事は實戦中は出来ませんが、故中支長江の世界一の秋の氣候も枯なばに戦く木枯吹きつり首筋撫でる北風も冷やりと肌にしむ候となりました。戦友に寄贈されてゐました浄土本春如月より拜讀しつゝ戦争と宗教否勇士と神佛、引いては祖先家傳等々想ひ浮べて感慨無量のものがあるのであります。

した戦友の骨を戦ひの跡に残しながら、漢口攻略戦に將木鎮附近の戦闘に……本春は南昌攻略戦に戦友の仇敵討取る爲、〇〇師團の任務に出動致しました。

元より一命は惜むものではありませんから今日の討伐には、此の突撃には戦死する覺悟はしてゐるのですが、神未だ御奉公の足らざりしを御教へ被下、故郷の佛まだまだ忠誠せよと囑まされし爲か、おめく存命永へて補充員教育に討伐に將事務に、銃後の厚き御後援の萬分の一にも報ゆるよう御奉公してゐる次第であります。まだまだ身は心の修養も足りなく此の上共御紙浄土によつて毎朝紅いの東天に向ひ感謝しつゝ糧とも致し度い存念であります。

へ申し上げるものにあります。
昭和十四年十一月二十日
〇〇部隊〇〇隊 大機時一郎
陸軍歩兵准尉
良い湯だと頭丈なる野天風呂
馬も濡れ湖州の町を一急ぎ(夕立)
水牛が流れてゐる眞晝時
下幹村烈士の墓で一休み
月が出て補充の歩哨ほつとする
燒跡に葵の花ぞ只一つ
春日受け土塚の前で砲手入れ
大仙山むくろの横に大岩松
松なくて柵ばかり七五三飾り
赫々と昇る旭日へ最敬礼
巡察の馬上いかめし防暑帽
水牛が子に乗つて来る夏の朝
蛙啼く夜の戦場へ皆既蝕
歩哨線脈の背擦る鐵條網
永しへに長江濁る曉の月
吾年も子も忘れてゐる彈の下
暗闇で急出動に身が緊る
朝露に皆な裸體で駈走り
馬面の長さへ防暑帽を被せ

又「眞の美は未完成を心の内に完成する人」にのみ獲得される一等と種々定義されてゐる如く藝術のもつ重要性は時人の注目する所である。キリスト教の音樂的效果によるその樂の音に憧れの若人のそれにも似てあくまでも現代人の表現を望む、もつと具體的に表現すれば即ち夏なれば夏でなければ味はれぬ涼味を秋なれば秋でなければ得られぬ新鮮なものを望む(出来れば春陽か二科の繪位もつて来たい)信仰誌にありふれの表現は最もいむべきことである。信仰誌をより信仰誌たらしむるものは信仰誌をはなれたる所より求めなければならぬ。

紅く燦めく波じつとりと手に取る砂安房の海

(千葉 近畿内海)

(本欄への御投稿ははがきにて御願ひします。)



一位 京都市 鈴木 白舟

初暦めくりて空を仰ぎけり

評 表面の意は、初暦を繰って元日の空を仰いで見たといふだけの平凡のものであるが、なか／＼に深い内容をもつてゐる。「空を仰ぎけり」は實際空を仰いだといふよりは、朦朧深いときの一つの仕度として、斯く表現したものであらう。新春がやつて来たといつても、それは抽象的なもので、初暦を繰つてみた時ほど切實に感じはしないであらう。

二位 東京市 三野 輪幸節

儲に朝日映れるスキーかな

評 私が上越の水戸驛に下車して未明から阿能川沿へ登つた折、行平の山の嶺に旭がさして銀光に映えてゐるのを見て希望と歡喜に胸がふくらゝのを覺えたことがあるが、此の場合はスキー行だけに、銀光の旭は一人であつたらうし、其の嚴肅さにもうたれたことであらう。

三位 小樽市 瀧 浦 静江

美しも樹氷の枝に月落ちて

評 此の句も亦スキー行の所産であらうか。つゝまじしやかとして、優美な上五字ではあるが、凝みきれない作者の心が、しびれるやうに傳はつてくる。「も」は感歎のもので、……である。こゝと、といふ程の意。

初嵐の湖のきはみの石叩

京都市 神樂院 島田 昌月

職兵の散歩の見えて桑を解く

無通寺 神樂院 久保田 栄電

一筋の心となりぬ除夜の鐘

飯田市 宮 澤 電子

名刺臺に添へてありけり福壽草

朝 鮮 盤 江 八 年 坊
會津若松陸軍病院 宮下 光雄

窓月によみがへるもの曠野かな

津和野 男 秋 芳

友近きぬ枯野の薄はけしを

津久見 石堂 柑山 生

袖なしや子供の如く老ひませる

瀧野川 牛尾 恵 蔵

元朝の護摩の火闇を振はする

大津市 森 尾 山 茶

巖角と地を結べる氷柱かな

高松市 堀 木 は ち

はらからの世に大勢や松飾り

高岡市 内 山 滋 水

大雪のラヂオたよりに生きてゐる

寄森 藤 山

雪の日のスキーの山を見て立てる

神 田 静 念

子を連れて旅居うれしき炬燵かな

東京府 豊 所 阿 部 征 昭

山時雨籠の村を隠らせる

澁 賀 縣 重 野 ふ み 子

しづかなる夜ふりし雪の深さかな

飯田市 宮 澤 榮 子

寒風に松葉を拾ふ女人かな

大津市 北 角 孝

白頭巾かゝるかに寒し比良の雪

大阪市 森 正 義

提灯の灯のあたゝかや寒修行

名古屋市 友 淵 青 歩

留守番の火鉢がかゝと燃えてゐる

山梨縣 程 原 一 幸

我が勢子は雪の露營に豆撒ける

大阪 加 藤 金 治

かんこんと鍛冶屋が槌も秋の暮

同 小 北 四 郎

初雪に鶯よびて梅の花

京 都 小 塚 翠 雨

薬家の中より延びて服の糸

小 樽 中 村 も ん

凍雲や遠くなりたる鐘の鈴

大 分 石 堂 柑 山 生

鋸の齒を立てゝみて日向ぼこ

館 山 安 田 九 卓

子を中に軍歌うたい七五三

投稿規程

官製はがきに一回二句以内
とし「浄土」編輯部併置係
あてに送ること。



智慧から慈悲への大行

心經講義(第二講)

中村 辨 康

(四) 題名について

(摩訶) 般若波羅蜜多心經

心經の題名は「般若波羅蜜多心經」と云ふのが本當ですが、一般に「摩訶」の二字を添へて「摩訶般若波羅蜜多心經」として居ります。

「摩訶」は「大」であり「般若」は「智」又は「智慧」であり「波羅蜜多」は「度」又は「到彼岸」でありますから、漢譯すれば「大智慧到彼岸」とか「大智度」とか云はるべきものです。

また「心經」の「心」は「肝心要」の意味であつて「大般若經」の中から、その「心要」とする文句を引き抽いて一つのまとまつたものにしたからであります。だから此の「心經」に前文後文のないのは當然のことであります。

「經」は糸、貫線、經線などの義で、天地の眞理を貫いたものだからであります。

つまり「摩訶般若波羅蜜多」は印度語「心經」は漢語で、梵佛用して居りますが、何故之れを全部漢譯して「大智度心經」と云ふやうな具合になかつたかと申しますと、之れは譯者の意見に依つたものであつて、漢譯しては十分に眞意を現はすことが、出来ないからであるとして居ます。

例へば「摩訶」は「大」と「多」と「勝」との三義があると云はれ、また「般若」は「般若羅若」の俗語であつて「知る」の「若」に「去る」の「般若」を前接した言葉で、般若、極智、勝慧、慧明などの「知り盡くした」ことを意味し「波羅蜜多」は「波羅」の「彼岸」なる言葉へ「イ」の「到る」意味と「タ」の「状態」を示す語とを加へて「彼岸に到達せる状態」即ち「終了した」と

か「完全になつた」とか云ふ意味の言葉であるから、一寸簡単に云ひ表はされないのので、漢語に譯さなかつたのだと云ひます。

いま此の經名を意譯すると

「一切の眞理を知り盡くした最も大きく最も勝れた般若に依つて、悟りの世界なる彼岸に到達し得た状態の内で、最も肝要な眞理を示す御經」

と云ふことになるのです。

誠に「名は實の實」と云ひますやうに、大體お經の題名で、その内容が判るのですが、なほ説明を要することは「般若波羅蜜多」に就いてあります。

般若波羅蜜多是菩薩の大道である六波羅蜜の一で「諸佛の母」とも云はれて居るところのものであります。

即ち六波羅蜜は

一、檀那（布施）波羅蜜（財施、法施、無畏施を行す）

二、尸羅（持戒）波羅蜜（律儀、毗婆沙法、饒益を持す）

三、羼提（忍辱）波羅蜜（耐苦、安受苦、諦忍を修す）

四、毘梨耶（精進）波羅蜜（被甲、方便、饒益を行す）

五、禪那（禪定）波羅蜜（法樂、神通、饒益を修す）

六、般若（智慧）波羅蜜（緣世、緣勝義、緣有情を得）

と云ふものですが、前の五は第六番目の般若を得る爲に重要な行であつて、單に布施、持戒、忍辱、精進、禪定と云ふのと、それ

それに波羅蜜と云ふ言葉が付いて居るのは、大きな相違があります。即ち般若波羅蜜を基礎として初めて布施、持戒等の行が菩薩の波羅蜜行となり得るからで、普通に行ふ布施、持戒等の行は、小乗の聲聞でも或は一般の凡夫でも、その全部とは云はないまでも、多少出來得ることであつて、必ずしも「波羅蜜」にはならないのであります。

大品般若經第一序品に

「菩薩摩訶薩は不住の法を以て般若波羅蜜の中に住し、無所捨の法を以て應に檀那波羅蜜を具足すべし。施者受者及び財物は不可得なるが故なり。罪不罪は不可得なるが故に應に尸羅波羅蜜を具足すべし。心動せざるが故に應に羼提波羅蜜を具足すべし。身心精進して懈怠せざるが故に應に毘梨耶波羅蜜を具足すべし。不亂不昧なるが故に禪那波羅蜜を具足すべし。一切法に於て著せざるが故に應に般若波羅蜜を具足すべし」

と云つて居ますが、この「不可得」と云ふ「所得」に捉はれない謂ゆる「捨」の心境こそは、般若波羅蜜の深い智慧に依らなければ出來ないことであります。

例へば「布施」に、財を施し物を施す「色施」と、精神的な利益を與へる「法施」と、恐れを無くなす「無畏施」との三があつて、それを私達が行ふにしても、容易に完全を期することは出來ません。私達は中々報ひを要求しない「無所得」の氣持にはなり

切れないからです。然るに般若の智慧が幾分でも明らかなりなれば、智慧の働きは遂に「慈悲」となるので、この慈悲の心からなす「布施行」に依つてのみ、親が子に對する布施と同じやうに、それからの報酬を要求しなくなります。

また「持戒」は、小乗教では律法的な二百五十戒など云ふやうな規律を守るのに過ぎないのですが、大乘教に於ては一切の律法を守るばかりでなく、一切の善を爲し、進んで一切の人達の利益をはかる「三聚淨戒」と云ふものをなさねばならぬことになつて居りますが、是れ亦た容易なことではありません。爲さねばならぬと云ふやうな、他から與へられる律法が、満足に行はれないのは分り切つたことです。然るに般若の智に依る時は、天地の道理がよくわかり、誤れる多くの人々の憐れな姿を悲しむ心が湧いて來ますから、この三種類の戒が出来るのです。

また次の忍辱行にしてもさうです。耐忍、安忍、諦忍の三忍の内、苦しみに耐へ忍んで行くことは或は人に依つて出来ることでせう。苦しみに安んじて行くことも修養し次第で出来ませう。然し他人の苦を諦察して、而かも其の苦難に代つて自分が之れを受けやうとする觀音菩薩の如き慈悲深い忍辱波羅蜜の行は通常な心では容易ではありません。

精進も亦たさうです。至誠を以て敢然として進めば鬼神も三舍をさけると云ひます。それは宛かも甲を被たと同じであります。

う。また目的を貫徹する爲には「何とかして」と色々に方便をめぐらすことでせう。一心になれば何うにか道は開けるものです。だが他の人々を益せしむる爲の精進は、慈悲心なくして出来るものではありません。精進波羅蜜の目的である饒益有情精進こそは、般若の智に依てのみ可能です。

第五の禪定波羅蜜も、精神の安定不動に依る法樂住や、精神に依て得る神通定などは、畢竟自利的なものであつて、波羅蜜の行とは云はれませんが、衆生を饒益する爲に、高潔な人格を養ふものこそ、般若に徹しないことは、味噌くさいのは上味噌にあらずの譬へのごとく、何うも悪くすましたところがあつたり、悟り顔するところがあつたりして、本物とは云はれないやうです。何うしても慈悲心が豊かにならなければ、禪は出来ても禪波羅蜜にはなりません。

この五つの波羅蜜行はいづれも般若波羅蜜の前提たるものでありますけれども、實際には般若に徹することに依つて初めて段々に深められて行くものであります。と云ふのは、般若波羅蜜も縁起を悟り第一義を悟るだけでは盾の半面だけでまだ「慈悲の一面が如實に現はれて参りません。何うしても「縁有情慧」と云ふ慈悲の智慧が出て來ないことには完全にならないのです。

ところが、この慈悲と云ふものにもピンからキリまであつて、普通大別して

一、衆生縁の慈悲

二、法縁の慈悲

三、無縁の慈悲

の三を擧げて居ります。大智度論にはこれを説明して

「愛と憎と中との三種の衆生は正等にして異なることなく、十方

五道の衆生の中に、一の慈心を以て之を視ること、父の如く、

母の如く、兄弟、姉妹、子姪と知識の如く、常に好事を求めて

利益安穩を得しめんと欲し、是の如きの心遍く十方衆生の中に

満つ。是の如き慈心を衆生縁と名づく。多くは凡夫人の行處に

して、或は有學の人の未だ漏盡せざる者に在り。法縁を行ずる

は諸の漏盡の阿羅漢と辟支佛（緣覺）と諸佛となり。是の諸

の聖人は吾我の相を破し、一異の相を滅するが故に、但だ因縁

に従つて相續して生ずる諸欲を觀じ、慈を以て衆生を念ずる時、

和合の因縁相續の生は但だ空なり。五衆即ち是れ衆生にして是

の五衆を念ずるに慈念を以てす。衆生は是の法の空なるを知ら

ず、而も常に一心に樂を得んことを欲す。聖人之を慈み意に隨

つて樂を得せしむ。世俗の法の爲の故なり。名づけて法縁とな

す。無縁とは是の慈は但だ諸佛にのみあり。何を以ての故に諸

佛の心は有爲無爲の性の中に住せず、過去世未來世現在世に依

止せず、諸縁の不實顛倒虛誑なるを知るが故に心に所縁なし。

佛は衆生の是の諸法實相を知らず、五道に往來して心諸法に着

し分別取捨するを以て、是の諸法實相の智慧を以て衆生をして
之を得せしむ、是れを無縁と名づく」

とあります。これに依れば第一の衆生縁の慈悲でさへ中々容易の

ことではありません。佛道を學ぶ人々の所有する四無量心（慈無

量悲無量喜無量捨無量）から、親愛なる者も、憎みや怨みのある

者も、親怨なき中間者も皆な平等に、均しく十方一切の衆生に、

利益と、安樂とを與へんと念願して居る心だとありますから、私

達凡夫から眺めると、殆んど佛の慈悲に均しいとさへ思はれる位

です。

第二の法縁の慈悲になると、前の衆生縁の慈悲ではたゞ念願の

みであつて、たま／＼出來ても親子兄弟親戚師弟友達などの間位

のところ、怨讐を乗り越えてまで慈悲を行ふ如きは、到底及び

も依らないことだったのですが、聞緣覺の聖者達になると、凡

ての事象は因縁に依つて起るものだから、その當面の事態の裏に

横たはる色々の事情を觀察するとき、諸現象の實體は畢竟平等の

「空」の状態であつて、憎みの憎みとすべきところなく、怨みの

怨みとすべきところなく、人々が誤まつた考へを以て唯だ徒らに

樂をのみ追ひ求め、却て苦しみをばかりを得て居る憐れな姿が誠に

氣の毒でたまらず、何とかして本當の喜びを感じるやうにしてや

りたいとの氣持から、色々苦心して眞實の喜びを與へんとする慈

悲心であります。即ち諸法の空相を知つた上に出て來る慈悲から、

これを法縁の慈悲と云ふのです。

第三の無縁の慈悲と云ふのは、諸法の空相に徹する點に於ては、前の法縁の慈悲と同じやうではありますが、その悟の境地（無爲）からも抜け出て、しかも現實に群がり寄せ来る諸縁にも捉はれず、諦觀の住まる所なき無縁の世界に於て、依怙なくして依怙しつゝ、ひたすら衆生をして、諸佛と等しい般若の智慧に依つて、永遠に失はれることのない法樂の世界に安住せしめんとするものである。

弔 慰 行

八隅部隊
古賀隊長

古賀登代一

亡き父を戀いつゝ吾子は死しけんと勇士の母の少し泣きけり

乳房吸ふ子の髪撫でつ若き母健氣の覺悟打ち語りけり

汽車を待つ小さき驛のヒソとして冬の夜風の身にしみわたる

り、心に縁ずるところなき平等の大慈悲であります。従つてこれは佛のみの持ち給ふ最大なる慈悲であるわけです。

このやうに、般若波羅蜜をみがいて行くのに、最初は緣起の理を知るのを基礎とはして居ますけれども、それに依つて第一義空を證悟するばかりでなく、衆生救済の眞慧なる大慈悲心に燃えるところにまで進まねばならないのであります。この故に、六波羅蜜は慈悲心を養ふ爲に、繰り返し、繰り返し、修行して行かねばならぬものですから、最も具體的な行としては、第一の布施波羅蜜の重要なことが推察されませう。

だから菩薩行としてこの六波羅蜜の外に布施攝（財法の二施を施して衆生を攝取し佛道に向はしむ）愛語攝（衆生の聞いて喜ぶ親愛の言葉を以て道に向はしむ）利行攝（身口意の三業皆衆生を利益して佛道に向はしむ）同事攝（衆生の事業によき伴侶となつて佛道に向はしむ）

四の攝法が實際的な布施行として擧げられて居るのでもあります。つまり布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅蜜を行つて般若を磨くと同時に、その般若の智慧に徹底して、衆生への「布施」を以て波羅蜜多（彼の岸に到らしむ）するのが、その目的であります。

然しこの「心經」に於ては利他的な言葉としては「度一切苦」と「能除一切苦」との二句であり、自利的な言葉として

粗朶くべて山家の夜を老父母と亡き子のいさを語り合
けり

月残る久留里の町は凍てつきてさすらいのこど宿を求む
る

霜深き朝の山道登り來て戦死の家に辿りつきけり

碎けてはまた散りにける白波の雄々しく見ゆる安房の海
岸

富士ヶ嶺は行手遙かに眞ツ白く目を射ることく聳え立ち
けり

山すがた峻しくなりぬ汽車の窓さすがに高き甲斐の國か
な

夕焼けの裾野の町に亡き君の面影偲びはるくと來ぬ

寒々と杉の木立に圍まれし君眠ります御寺訪いけり

わが夫の歸り來しごとなつかしく胸のおどると涙流しつ

ほこり立つ銚子の町を俯向きて戦死の家にわれは急ぎぬ

若妻も母も弟も打ち寄りて最後のさまに聴き入りにけり

は「無有熱怖、遠離一切顛倒夢想」の一句があるだけで、空を説くことに全力が注がれ、その究極たる慈悲の意味が強く力説されて居りません。

衆生の「苦を除く」ことは、慈悲行の一つに相違ありませんけれども、それは慈悲の消極的な半面であります。それをさへ簡單な言葉で片付けて居る、此の心經は、淨土教の深い慈悲を説く教へから見れば、まだまだ究極宗教の經典でないことが合點されませう。

しかも、その言葉が往々にして除災的な意味に利用されて、迷信に似た弊害をももたらす原因となつて居ることも、また頗る遺憾であります。

然し乍ら心經は決して俗信仰に云はれるやうな除災的なおまじないのお経ではありません。また誤られ易い最後の「呪」の如きも、佛道修行の目的である「めざめ」の世界に行かんことを勧めて居るものであつて、普通一般に「呪」を「おまじない」として居るやうな内容ではないのです。この故に心經を読んだからと云ふことだけでは「苦しみを除かれる」ことにはならないのです。

つまり般若の空に徹することに依て煩惱がなくなるから「苦が除かれる」ので、心經を読んでも「空」を理解することが出来なければ、謂ゆる「論語讀みの論語知らず」です。

更には佛道の本義から申しますと、前にも申しましたやうに

「空」を理解するだけではまだまだ本當でありません。「空」を理解した上におのづから積極的な慈悲心がにじみ出て来て、初めて本ものになるのです。

此の意味に於て、心經は淨土教的に理解して始めて其の眞意に徹することが出来ると思ひます。

つまり心經の宗教的理解としては、單に「空」を知り悟るだけではまだ充分と云はれません。また神秘的な解釋を下した「秘密の中に功德あり」とするやうなものも感心出来ません。何うしても合理的にその道理を理解した上に、それを體驗せんとする「求道心」を起し「信」の一念を貫徹するやうに、心によく理解さすべきであります。

元來「お經」と云ふものは、宗教の「説明書」であります。藥で云へば「功能がき」であります。だから「お經」を読んでよく天地の道理を理解し、それを實際生活の上に現はすやうに心掛けるところに、讀經の本當の意義と價值とがあります。

此の「價值」こそが讀經の「功德」です。何か分らないが「功德があるさうだ」と云ふのでは、畫にかいた牡丹餅同様何の足しにもなりません。無論凡夫のことですから、理解も不充分であり、體驗も困難ですけれども、幾分なりともより多く理解し、より多く體驗したい願望だけは持ちたいものです。

では、之れからいよく本文にはいりませう。

S.S.S.

金はンベ金
亂賣す

金合スエンサる優にンベ金
！をンベ



¥150以上

★ 筆年萬合金・スエンサ

編輯後記

◆綿のやうな初雪がふつてからめつきり暖かくなりました。梅にはおそく櫻には早いと云ふ陽氣が思ひの外早く訪れてくれたやうで春の思ひに心が躍ります。

◆戦時下の冬はとほしい炭火に厳しい寒さを味ひましたが春の陽ざしにほつと一いきつけました。

◆その時に炭の配給をうけたのですが、編輯子の家では四分の一俵分けて頂きましたが、ひどい處では一軒に四十匁と云ふなきけな配給もあつたそうです。

◆實際無いのなら仕方ないがあるところでは出して頂き度いものです。がこれは主観的な問題、時局認識の問題だと云ふのなら、人に説くに法を以つてせよと云ふその法の用ひ方が未だに甚だ拙な

いと云はざるを得ません。

◆然らば、法とは何ぞ。説くとは如何なることぞ。法とは説く仕方に非ず、説くとは辯舌の巧拙に非ず。

◆身を以つて説かづんば何ぞ衆生を度せんや、と云ひ度いところであります。

◆さて本誌の巻頭には放送局教養部長小尾純治氏が人生と信仰に就て語られております。人生の信仰それこそ二にして一なるもの。

◆「半島婦人と兵隊」は歸還勇士が體驗した涙ぐましい朝鮮問題の銃後活動を物語つて、強く心を打つものがあります。

◆大島徹水僧正と松井大將の佛縁も新聞紙上で伝えられておりますが、本誌のものは大僧正の直々のお話しをもとにしたものであります。

◆心經講義もいよく本文に入りました。

◆本會出版物の御註文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は

東京八二一八七番

◆御註文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さい

ますよう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◆勝手乍ら代金引替は一切お断り申上ります。

◆その他の問合せは往復はがさかまたは返信料同封で、御願します。

◆會員で御住所御變更の方は現御住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◆本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十五年二月二十日印刷納本
昭和十五年三月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明治會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ケ年 (送料不要)

大野 中村 前田
法辨 聽瑞
道康
共著

菊版四百五十頁
總クローヌス裝
本號五號字間四分アケバラルビ
挿繪寫眞十數葉入

定價 二圓三十錢
送料 二十二錢

淨土宗讀本

淨土宗の教義は？ その實際は？ その歴史は？ その現狀は？ つままりいま淨土宗が持つ凡てのものを、萬人に解るやうに、立派な體系のもとに説いたのがこの讀本です。しかも執筆者は現淨土宗の第一流理論家と實際家で、永く後世に残る定本とするために、何回も何回も協議を重ねて苦心練磨の結果出來上つたものです。校正も印刷も製本も慎重に慎重を期してやりました。ですから、信賴して讀める上に、淨土教義に就ての正しく廣い智識が得られ、書架に飾つて恥しからぬ書物です。正しい教義・信仰を求められる人、淨土教に就いて知り度い人々は勿論、宗教とは何かと迷はれてゐる人、時局下僧俗等しく自己の信仰を確固たる體系の上にすへるために讀んで頂き度い讀本です。

近刊豫告！

法然上人鑽仰會發行

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ボ総ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢
(品切)

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢
(品切)

中里介山著

(三六版二五〇頁クロース裝)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子
倉田百三・郁芳隨園著

(四六版總ルビ付)

我が信仰

定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十五年二月廿日印刷納本 昭和十五年三月一日發行

淨

土 第六卷 第三號

定價 金十二錢(送料五厘)
滿鮮臺等 金十三錢
外地定價